風流曲三味線

へ13
1418

風流曲三味線

目録 一之巻

千堂私印

1418

第一 女房流乃并の畏の隠家
御室乃花見幕
ちりのつよいだぐ青
ある滝乃かゝ浮
鹿付のよいちいが青

第二 仕掛のよいから行聟
想能ハ高橋
かつておちこ男代
以男ハ男流狂ひ不
鹿ゝゝぬけこ男代

第三 一盃喰して乞食てゆふ命

見せかけ大ぶん
ちりやいの賞誨
わけて悔し乃
内蔵の銀箱

第四 鴻東江来迎三鶴の対酌

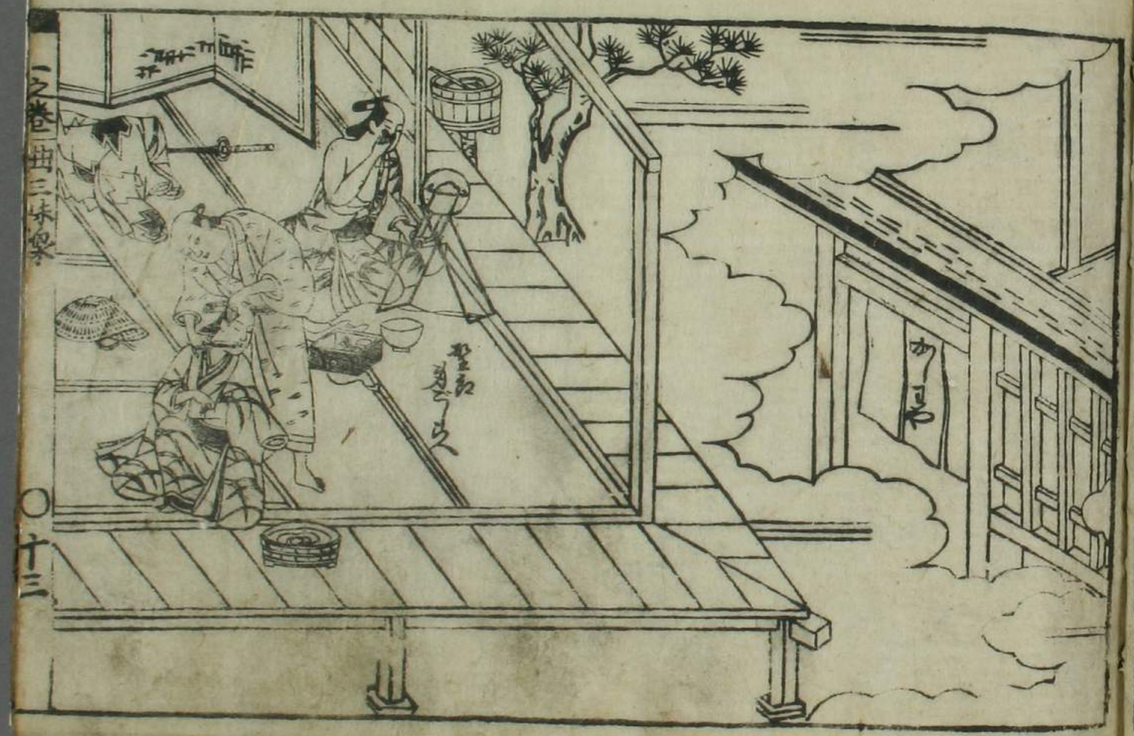
黄金のちごへとハ
金よつりがへの女良
長屋の外牛戸
わいやい女房

第五 亀よりしひと掛なる曼陀羅

まんがのやこの晴宿
わりごゑ足乃含焼
貧のねをこふ庶の
うこてい生来ん

第六 女房流乃并の恩の隠家

南風に迎りのよい風車の鶴流
むりより花の鶴月雪となりて乞このしこと
こそ真ぎる事おそらく塵りとなる智恵
わり教に飛びなでて鶴から晩をなしてついよ
鍋わさそ首のかしといふ真つきそわしびせら
ゑと思ひつきう外ぬぜりの楽しこて
して其実かりしつきといふまわらぎ望よしい
なから我おがわぎ見わいわね花もおりしらぎ花葉が
赤とそ酒のねをしてもなるぞ。こで常住見ても
黄女ハ名木毎よいこまぎ嵐まちらぎ無題の
下に首を入て艶教となりわ。夜ハまこいふよ
ばぎ命をむしるかどかりしろいまわつて鶴夕
飽といふまなく世界にひ鶴りよ飛やうなるの
しこ釈迦の時代からないと云て世この賢沢人も



うつ花妨事のんと蕩代の筆の地と賞ぢらるせ。
山林行本と切るさ後傘一なによる時がんね
敷せうあるなどん中の恨でなし。さりとむごいせん
さく女郎がる事とるがゆいとおゆれど。ゆ元も
軸の内へ入ぶり袖をひらめり日刺の髪の紙を。
白粉をねりかつし女丸者は志事と陳な顔は
丸袖に忘れて。ゐる蓋寺あ八坂清水を法の
ちゆり菓屋をさがしわりきわるは五十丸者を
女にしのびかよひ富貴は抱ねい女と昼稼ぶらせ。
又はおなじ花中の同士対ねをなしの
てんがう。秘学のしるしにはよしに黄な毒光
顔に面皰わられ。袋のけうとくなるも事也
きなくのいさづら大方の姿に秘伝のまゝ
とんでまゐり誠のうとそしる顔つきおかし。
さらく来の身のよいふ形ど屑が出て。家身

なかるもうかし光皆むりしくの事にしておそ
るさ事はむ鬼もまらふとやん光ありまし
のもやうと聲てそなるがゆいむりしかしおよび
きくおよびしる聲りし事とうつ事ぶらも
いかし今の世の女郎の身れ上さ毎ぐなりし
事大なつくしひ出てまゐしやさんと羅を
祖母も折ふろいで。ゐしむりとうこれば大名
来社とちじめとし光何ものの事なくさこと。
弁当を変そひらき花をかんるよりは使て
んのうきこうまゐしわらおりしの花の二月

第二

仕掛のよいから行聟

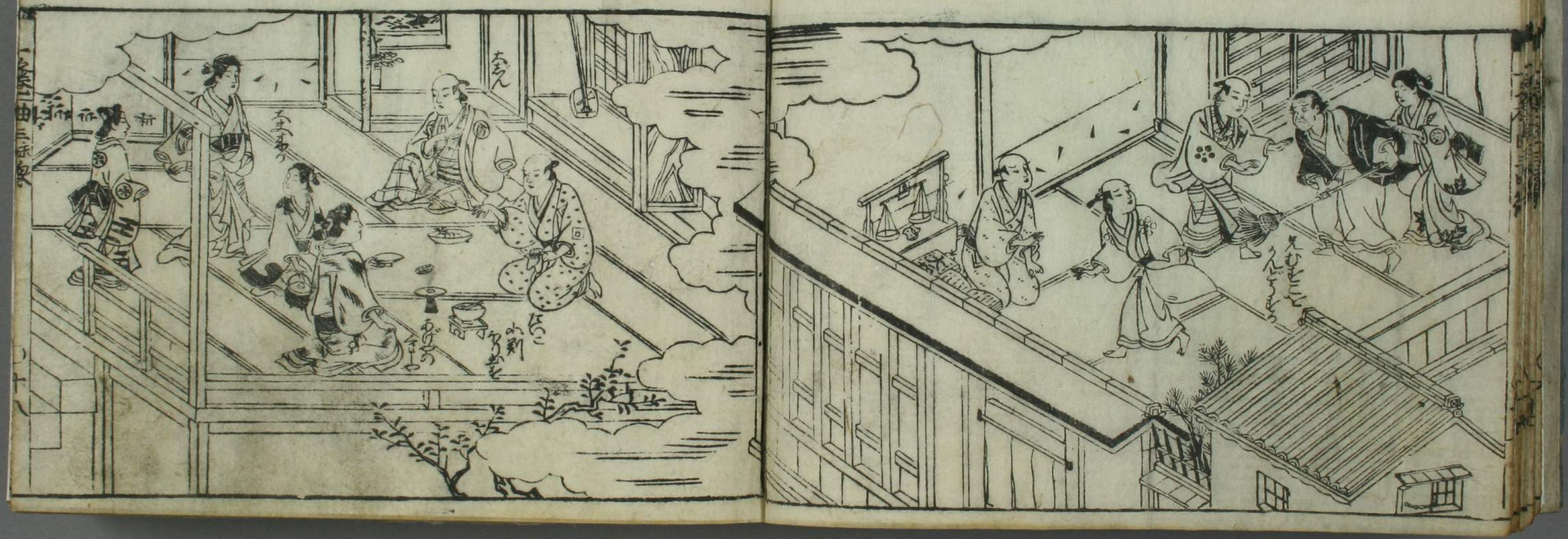
想願はる橋はうつておちこ身代
世はなきれは江の刀と化ものと。人の問題を金銀
そうし変に都の真中に代の銀持代先祖書
の鐘とつかまつしや来の今に至るこ銀のなるまれ

山なりて利銀諸気計にの嘉田方の貧家の
耳をおどろかし我とそれを指九長入とそ六十
余家になるましが母の人の見ちがいていつと
なく身祈うまくなりて母るむきはむかしに殆ら
ぞ殆ら気がさしてそれまつし生れたがのづかふ自堂
さわらるれかるしまけは兄弟三人ありしが並飢は
若門とそきつ母うよく坂田若干郎にそかくの
生れつき人皆大若干郎とよびしがそれにつまて
不明の風俗坂田が藝をうつしねまごとに物を
ゆる女郎をまて入まいぶん位をえて何などの粋も
又六気をはふりつけ申しまごはき本も坂田流
の御をいそおなさよりまを合せ和気から門上
おくるかどにまこまを事を治てまかもくせつの名人
今都の人皆にはは若門ようぐ分都もなく鴻東の
そよこ十文ぐ中りまの石が鶴の尾に奥の

わる事を知ねいうる元手に身祈皆にかゝる佛性
なるおやぢもかんかん袋の口をひらけおきれて何の
呉月もなく又年いせんに門流勘当していづくへか
しらうなれ次の弟半内に家をゆづりて身は
隠居のんざうまつ此半内きつ母ようぐ干石れ
にでもくるしからね生れつき口泊よくりやまあつて
まかも実なる和詩のおとしに入たづ三皆山下半内
が風にうつりて又なれおやぢの宝寶なりしが兄を
さしおれ弟の家つくるなりと兄も三年いせんの秋の
夕舞にはあまもまれぞなりまきしは娘を今此世の
ねはざりまいりし紀聞りとか為らしれふうぞく
山なかをんは兄程にも似るものかと恋志のぶ人
京中に何子人といふことをまるぞ毎日喜こうりひ
入れど親仁を談合にそのうぞ二人の兄を訪なく
なりしうへは此家継まべき男子もなく下と小今

門縄ハ無銀が色ぐるひて皆にあて老の入まゐ素
にあらず○日比の津気もよりかまり賣より無ち
とてこ家内へ紙わいの裏子を孫がひぬ月をとり
ゐる和ハ株たりて座ひろく世ざりのむし
銀はわりて抱好にしらべる経帯を今ゐる方の
さいまひに入聲の義銀そ此家とつがを紙のと
ゐてこ格貴目入十枚こゝらへ中にかゝる紙地と
仕込ハ寶尾石はおとまりいかぬ聲そこもわき
銀百貫目黄なる姫れそ家屋敷ゆづりて此身ハ
其目より愛人の事といふ皆類の世の中此家ハ
裏子とるよす数をあらぎ其中に雑波の浦よりれ
此大海の名の果金盛のむりに世の人のまゐる
かどのす仕つて新町あの義世にのがりつめ
身祈ハそぐり奴に揀おまどく賊寶皆にあし
さまが名高紀大臣の遊ある男と成て四季小役の

加さ○小袖三枚袷も大分りて子程女の本綱
布子の男せぞ有て偽屋をまゐのわまれに
やりく女代たが信そ三位二人の命をつなぐ
上着無れ偽貨を二ケ月は早ゑづくわてがれ笠
を那にも味噌にも菜薪にもしてかも紙燭りと
そ若盛にうづくらせくらしぬ其生れ付こゝ
まで気さく成す大和屋甚吉家がれ親といふて
もなりうぎことに浮世おどりの名人皆人和玄と
わざ名せり今此ふ自由なりまゐて非是見せ
と世に銀といふもの大切成すをあり和れ二三年
いぜ今此気がつけばふしまりの家ハ一軒れとむる
ものをとりつゝねむりしをなげき縁に気を紛て頃な
浮世のいとなきをとおわんなりぞなる西浮世小路の
都富の細吉郎の入むこの口をさて出し其和玄
れがさいまひのまと鈴食人まぎにちつゝまゐて



五銀百三十貫目は目にはへて身祢と縁布衣綱
儀抱何かた好次第にて[illegible]ども人がきもいり子貫
目が商もある也ふ仕掛るに和ぶ[illegible]ひ[illegible]社合
先見せうけ銀ハをまずべしと右の三十貫目とハ
銀の封もたがへず水濱の伯父が方へひたかふを返
いまだゆづりの百貫目よハ手もつけず外ゝより
暮るわきなく抱そ利法大分わがり来ハ志るぞ
打見よハ長者のごとくうましや夜でこそむかし
恵と仕のこしる都の五里大坂屋の女郎に
先見てきと手をうこまと又指宿さしおとり中此の
さむいまを目をれわつい時分のかきの[illegible]下ハ黄父
にあのかつらかしまねる死仕出し上よハ何となく
ふろ拝ぞ今ハ鳥の嘴の大役上絵かりまゐる世ぶと
職のたおりきてこぢの大見ぞし素見に細張の
見るざうは饒原の笠をうこけ鶏鳴が頭目

孔雀の音ゝ云和といふ事知の来社もかゝ同じ事
なるべき抱田又人かしつまれ水の門よりさでめりて
なりとこれお雑波よわりし時より定宿にて見
かけしわげやて入まべていも気ハとはをわいて志ゞ
ふさがどわんまり行とつぶしそ[illegible]や雑波の
わきさうハさ度まして嘴ともかて半分死でおり
ましさが五里より外人ハうそつかね抱かと疑れば
町から来るものよもゆゞんなるね世之五郎のるハ
今ゆゞと太きなかし[illegible]とかなしがじゝに[illegible]
来院さりとてハおかしことそれ志つ孫ハ[illegible]
のおんぞし[illegible]の面も武面もかゝ嘴が[illegible]
抱て出てけいそのわるかと[illegible]
やうと大臣のお親とまりなれば[illegible]
中ハ五郎いせん寄橋屋に柏屋方にて[illegible]
お情とお詳とのこされそれより中絶なされ今も恵と

まつやがしたれ出とかしとてしかも取て今日は耕づくや
方にれ入何とぞりらて見ませんと夫婦ちゑを出し
ぶふゆうゆふまんまとりしひがかなかて先は我こが
仕合先といふも名高い丘野のれ威光ゆとじゆう
にれのがされ元用なりまた大気と出し産まつかりく
男女にも小判の花をさかせ花れ隣な女良いづれそ
も七八人つかんで来り産なるにきやふ仕れのよし
今よい者の稀な時先はと宿屋の上下いさしをなし
おなが一つなれば おいくと又六人も一度に返すとね
あがらくおつて大夫れ出とかせば夫そく先は示なると
座れはなりしまれば まづあつたりとまらふてのまつ
と座につかれ示出れつて大夫婦はそなつてかれに
おいさまう目のそりつよく把ぢしかしふこりをわさ
あつく髪のゆひぶり弟をして歩行ぶりをやうに
乃中のつきりとして旁波子寿はいきうりまぐ

おがわりと弟として孫さんのかまりね梅酒のしかつて
引ゆうさうふゆうまふゆうまふ角くの大さつぎ元で
なけまいば里おりしかしと女良宿屋のかれが
よりしそうしてこしね それなりまぐ元のつて全く大夫
抱しまして下座なにうつし手池めて寄わんとこれ
夫婦親方門達中る橋供頭ともに宿八百文本を
でおをしのうし請合中せば全に小田をいかせ然ば昔
日がらもよけまいば日ゆるまと出まで それ迄はなふから
十日わまりもわりかえや他の人は難親見とる所迄
なかなり勇猛の日とは夜におけづかと万事大きに
出て宿なしの酒をぐん進付むらぶをひとく大姓の
大臣魂ハつやしきも人の地になりたれて世

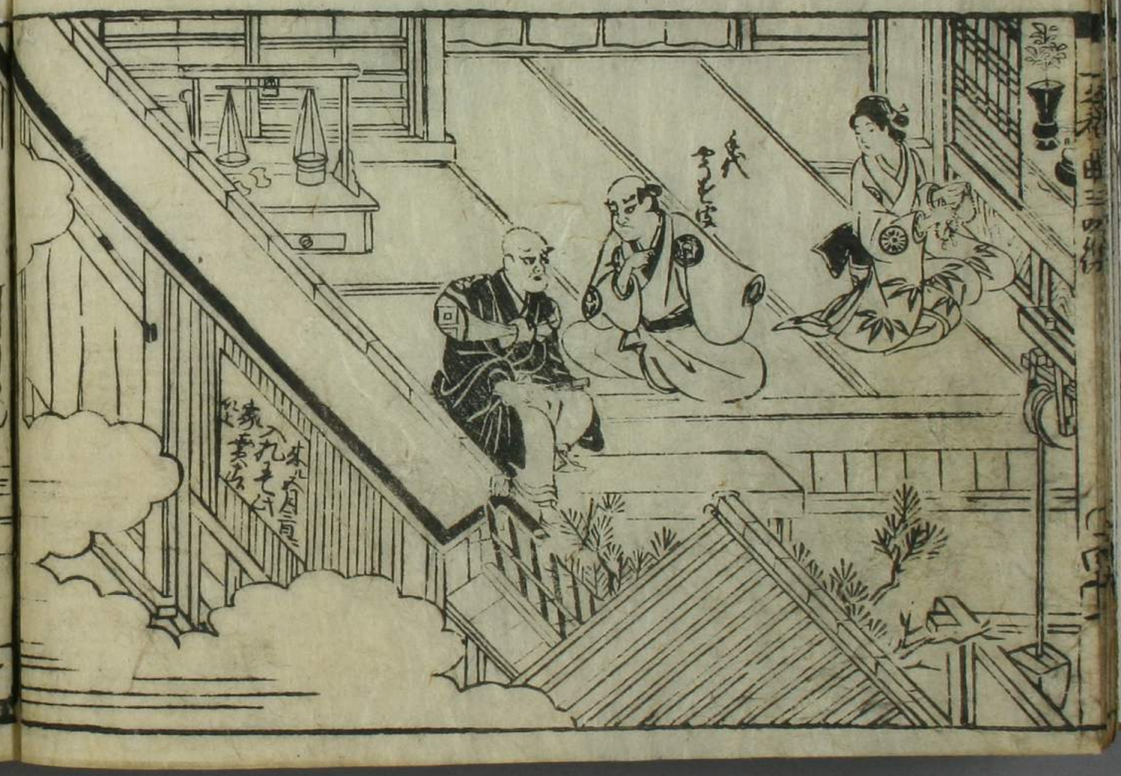
第三 一盃喰して乞食にはらふ命
見せかけ大臣もりかいの賞論
木綿布子に絹衣裏かけて恭うもなかりて

まりなんすと申さしに無くさぞもきこれつゝ我が今年
いせんは勧南請志ぢらく乳母が方にかれたまゝ
無性友達方に二夜三夜づゝ通り義に通りわりき
命さへつゝらなくば何とぞおやぢへ勧乳のそせうもと
二ひ海宅の親とこのこゝにうなく今さへの投書に
なつて一日ぐらしにせしかはよそ年妹はむことゝて
詔職をゆづり おやぢは法函志ぎりとゆゝ云ふ
引こもり浮生厚ふはいのうるとゆゝ今は佛の縄も
これをてゝ おろ前ゝるさるかどにむごい身にいなりね
結れば男とゝそもおりゝろゝねうき世出家と成て
いづちは旅た死は如身に無るがそんはんそいと抱しが
世にわるむりし本まゝるちとゝ朱にいつまりなゝね
ふりきけいゆくゝ請出をまのなゝね恵ひなゝが算の
鴻を待て夫婦と成一生かゝるもそいまつべきとの誓
とれりなりしまゝ思ひまゝ世は花ふりきゝ出家はなる

りゝは代勧請一つは家身のまゝ思ひ本まゝがさゝゆくまの
さゝりともなれば ゆめの君合てゆゝれ朱のせいを
えりどしお産に繋をてちりも灰ものこゝねゆゝ
ふ中をきゝ下ゝ刺髪いうしゝ度稼ぐひと泪玉なりて
なゝれば内儀もともに海となりしおいとしがや何がさそ
本まゝ母に合せませいでゝさいわいふおく産家に入
先へお仕合まそ孝ゝ身請わそゞをとゞむねゝ夫
おまへとふりきれ久いゆくゆきのどくさふまいおいを
れど靴のお身なれば力ないれ事先さゝ一のとまづ
かんなべえりちむりしにかゝねりそなし法是
根何りのが引ねくと思ひ切しんかもかしはせきこん
まそ易れば されば外でどさん世ね今お地獄のお子
のおいりとごのおつれわいは母本まゝ母のれ僧金本
何か八百六十毒そ恵びいゝまとゝせば夜内わきれ
地ともいはど志ぐらくあていつるかなゝど内儀婦の

懐別半学坊なれども法師なりがし家のわるび
長入今程は同心清水はふかく分入で佛のなと
孫がひ出家繁盛は戦らるとの元自分は佛なく
して家僧が佛とまだらく備しまゝ却て技備
上げ二のがろうとしきれ殘らば古忠立身家僧
そなわり時新入入し無心自然の二号なり是
と聟娘よあてれ物りこれとの事初是僧は長
入老とは法号四人娘といへるものと娘聟と称れば
内儀は奥よりもしるは出て後と申しぞれなるがら
父れそまゝまもが祝言の夜我くと見まて立
のきあひてよりつゞぬよ毒酒もわるべれいがと
わんじゃ女ふれそれくなる僧りと望まるまい
やあるいやうあるいやうあるいまゝ我ませての後斤を
にさて万よつけれふだ書うておはまん女程佛と
あるせん牽とうひ家業の稽古なれば同向

なされもされ時日は物りわれぞ世と三つ久身は鞋
とぬぐ世中まるべくりてあるべ城主奥まあれ
親しくこと親兄弟の信そも三号と志んぞ
事はあらざまゝ奥さまは見程世は志れてのの
分数とくし銭とつくろう世のおろかさ信の
私ろう事なるんば家よは大分備程なる眉世
中るもやも先達て家賊は封とつけ皆入れはこ
女しが殺る金の中にて三号が称うちわりと
中るる先同とつけ三十女家の入れ称れもあるべ
れまゞ入れねとそ我とも衣類をうきえ布子
ひとつのあれば何と紛りはゆうりのあれば出家
も時日前と来ん有事世方てれどいふてまいれと
あがり切で居るも別ぞう門徒は益の洞とあり
さりとおもふたまゝあるねうき身是と居へ
もしるおりも斤の酒人身をげいまんと志のふと



[illegible]

七百あまで招引まし樵木町の僧り産数に
むかへて家抱ましてこのしむ気中に大坂の親父
は首尾をきつけ今ふもわをもさなして俄に
のがりことわりかしに産数へかけ入手ゝ去のれ
胴まり肝のふとき母かかけいせ賞とそ代まう
けれいに金をもせてのがしこか佛の事も親の
事も主従まね従主従あるをのぞうとくめぎざん
でもあ従今ぞ見りまぐに恥ぬと残念るわ
将蔵猫指を引ぬこり下男ひとつて思ひこへ
力ぶよいを四人平琴浦が手を引きづかひまる女
女たち男なんぞ百貫といへ十三日残りしても
其貫三百目八男の代よついてわるさりとあやち
毎日五年しても今まうなまんぞのたりといふ
女郎のまつ六分の金をあづけらるてくれたまへも
もとしハ合点のもつしやまもいわんまりぞうかく
志やとは何とうぎりにいづくたなく出てゆきたり

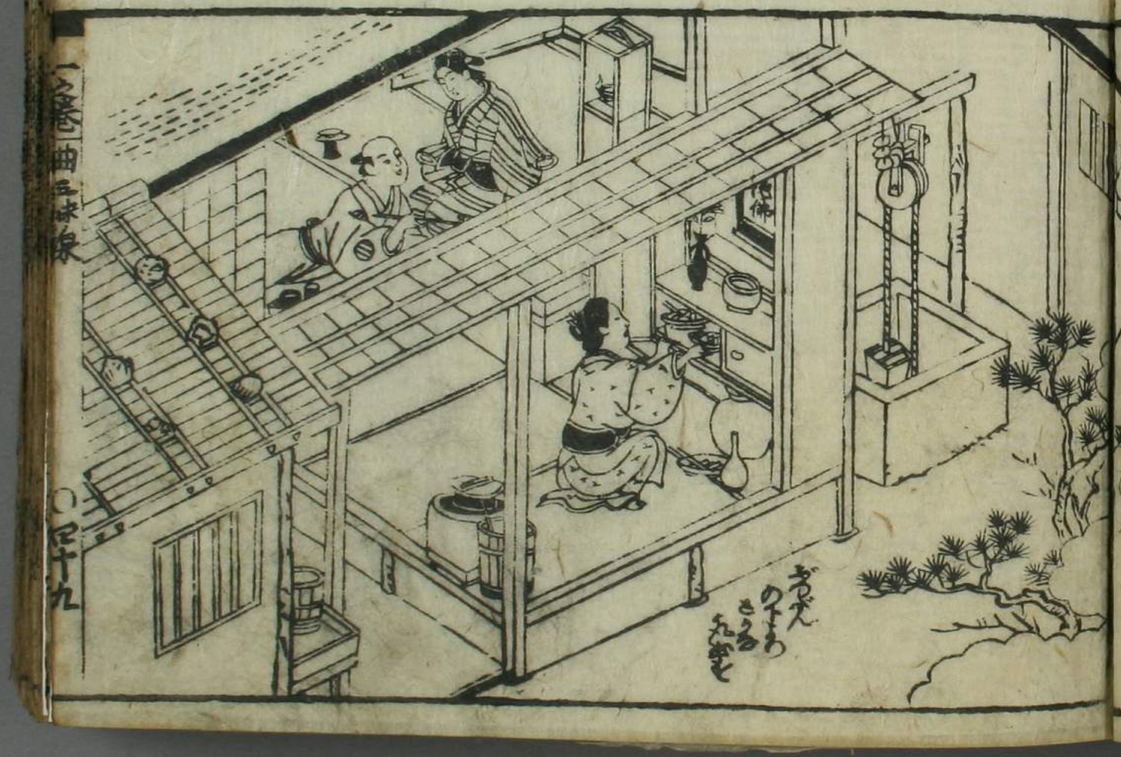
[才人] 亀ありぬひと掛ちまる曼陀羅
まんだれ世の時宿わりなる足の命焼
古今女郎賞の仕直によい仕舞といふ稀なり
家抱計を皆にて人と大分ことまねが上ハ仕直
ぞりしおろれや和甚世るへ死ぐらに見せかけ
ふかくを男をかくしむりしの風俗なくて おのづ
ら愛者もさがり者の表といふ前に隠家を
りとめて有は窓わりて六口は縄簾をかけ
朝は暮かづくのあげり袖ぞりの長病地夏ぞ
宇津の細乃の心地して夏にも人はかわいぞ抱の
さびしき夕へ蚊ふまへの猫屑賣おしこは自僧
の残れりまつるなどせつしきまを寄て世をまつる

他人でもあるまゝ親類の男として我に恥辱と
わたる仕形ぞやへまんかんぬんなるぬと飛かる
と琴浦中へ急ぎて至まつてわなこれぞんぢ
なるまゝ子細ハかゝりくと城主家法師が如子
くりくたなし親の為身と賣りしと法才ぞ
ぞ殺れば母人わされてもいかなる因果ぞと
三人一所にしがらくなるて和基がいふ如ち
城主家法師がいひぶんがそんゆうぞ家舅な
がらも方親の長入ハ門院にかゝりとうち
我に一たいへ世おいてうおがへわれば二ひ古人へ
とゞれもしる覚悟にわらぞまして出家の
私ひわりて佛もいらぞ我と聟にしたる事ね先に
三宮とのけらるべし是とよくくしたるに因此
城主家兵も信もしらぬ大欲無慈の男め
法師とんと合せそちとたゞかり賣りし金をして

あるてうこがひなしどうくふくさへ城主家め
何とぞ為出し八ぞ死ましてと男とかがく四人平
ハそれにハ母ハぞ先代女房たゞどちらの不しさ
りのでわらふとも咲かくの慶ぜんさくしれば
とうらゆハそれハ私が弓箭わりと和基ハ
小刀おつ丸自害と見へしと二人わたてやうとも
死でハいよくたぢの上れ恥なれば夫ハ何とぞ
あわんわるべしか母へて柳木をなとやうくしぞめ
根四人平よい智恵ハなるかとしふ ハテちゑと出をに
およいぞじりしうそひなれし女房なれば
知て上にハりもや我おハそれね首尾こかく
太かこおつてえるい女房たゞと主上いてしとと
いふ主法ゆるなり箱なるがら夫ハ又我おが一母
とゆそくれむ今ちしぞにわふことハいひなるが
元我母ハ知畏にもせよ方便にもせよ一旦死ぞ

くるとやぶれ傘にて志のぎねぬれありおこる
気あれば筈とわきらわ田平の絵つぶくの志
細工していなりのおへなげ賣りして身稱尾を
見せる和甚は苑越もわるねそ毎ぢことを
きごとを習ばこうへ木綿の枷といふものを行
て糸よりかたき世渡りは乱をつつ。どうら
ハ人玉の嚊とこのこ都の株高見町家へ
勝元なまに出月見をかきしがりとより人を
つかひ身の果よりわしのかとのこここの
よい女兄ものと主人の乱をこる事それなく
如きこのこのごとくごとくたてよりなま
ゆて。ぶおあまおぎんといふ女なにてかと絵今をひ
つかれしかそ身のかしこ知ゆへぞかし侍業の
おるもんおさつ夏なとハ種性いやしく十二三れ
時分からなまに仕祀て今ハ我不が屋めぐり。

ぎいぶんをれて女たいかなる強自慢をる男たち
も勝よりつけて巾着といふ名れども表向ハ
まごそんな事をしらぬ顔して久三がて今をする
にも上乱をし万まわどなく見せかけ主人に
心をゆるさせ月に六七度も国にてねせて陳
とりひろるそ仕掛のをさ毎じさ和歌なる法
小富の嚊が表をしてきおるもんとこび出されば
おりて出て三つ三つ抱縮して内に入おくこ女の
おまへ一ぶり左衛の母おや六束まりいこされ
ましてゆるなからまめなる立なからわそ時日ハ
黒く毎りてきこうし富から只今よびに来られ
ましこ切こお陳とりらひまして内方のれこ名も
をぐれ孫ぶ又りきひての東方にわいませうと
延ひいてしまはれど富の嫌の中されまるとハ
母も死まで端りして人なつかしがりて七度も



六条あり八仮合のる事一姫たにわいさき事に
のがつことあるべくといふ事ふひかしかひおよつ
まて時よりいかふよそられさゆうなれば、わやる
事もふ宝な浮世つゐ五がつりはおひまりふて
わやれとゆされまをいかれまをれがわをとも志れね
老の男ちかゝをわへても来りてござりまをれど
わんまりせつくおひまりふひまをさかいてと流
ぐそゆせばさすが下ぐのひまいまつ世ねね
奥なるれば、おやの男で子にわいさいの理く
おかくべつゐいて来れのよう志なしとをぐに
二階へかけわがり下に絹りの上に木綿の袷引
ちり日世の二布に仕繋てわしだやに立出に宿
の裏によりそいれば、お手ハでちちわがり嬢若
とすんて血気男絹れおの下になかうえじかう
なつて結りゆ事をしてゐるわりゝ夏と六何町結

わるぞをまゝ来をふなりのじや今といふて
ござつこのと嗅をせましうとふ時、茶釜なへ
ちづかにわがりまちかゆてござんしよとおふて
いかふ気がせきましことまづ茶をんぞかの男へ
きし出せば何してござるゆゝ言ねさ見ゆゝまを
居ましこと跳へかゝ去ゝ八九かゝわるぶびくこい
かゆと出し嗅別酒とつて来てもきれわなこ
おんぜさしなたものこさいといへばそくもハ
現銀に竪いおんさなじや酒のあつてもござり
まをとこ掛かゝ侮お焼の大酒利出ちかりへ
うつしおるんどのかんしてもきれとこの伝慣の
下こかりかながこ車ゑびのぶとうま切り意と
出し安隣とちがりこゑびくまおいのおきのと
かくまじつまたのこ出を若ハお手に女にひとろ
をごさせるがそんまそつよくしゐるも下ふかし

根[illegible]とかくが[illegible]ついて二階乃
ちしごとおろしがわんどうに火をとりて女
まさせばかりとにわるとも紙丸てぶところへ
行こと[illegible]手あり[illegible]よさ[illegible]わがり[illegible]天[illegible]が
つゐかと暦張の屏風引そ河内[illegible]
未枕ふろ何のわいさうもなくてたやとり
かゝるもけうとし根[illegible]まして[illegible]縁もござらば
[illegible]と下常[illegible]がらわいさうして男[illegible]
[illegible]ね女は[illegible]と丸[illegible]て[illegible]ありがく[illegible]
うどん[illegible]孫ませふかまぐ孫まいなら
とありの[illegible]松なりと雇[illegible]て[illegible]どんこつ
丸[illegible]て[illegible]れと[illegible]夜の[illegible]代[illegible]
[illegible]ま[illegible]春で夜ふり内方[illegible]りのやくそく
[illegible]れて[illegible]孫てのり[illegible]のぶ[illegible]
[illegible]とかり[illegible]

三尺手のごとくて八[illegible]し大夜[illegible]て戸[illegible]の
おに孫てゐる[illegible]内方[illegible]が来て[illegible]
どのいちろとゐて来るとおく[illegible]わげて
夕[illegible]今[illegible]れませ[illegible]ゆへ中[illegible]
[illegible]ましことがよわふて
[illegible]せば[illegible]
ごろさが[illegible]まわ[illegible]
[illegible]れ[illegible]
血の[illegible]痛[illegible]でわの[illegible]
[illegible]れ[illegible]内方[illegible]
[illegible]わの[illegible]
まして[illegible]付[illegible]
[illegible]
鬼の毛巾[illegible]
たとへば月を[illegible]

なりしと大きさなるぬ恍び和惠もかんこんの
愛はんこゆうな仕合ぶ上ハ子万友の金も自由
の身なれバ気なれおの毎り子あまそまんごうゃ
結度称ぶ叔父長治やハ海去家まそ法花の
まんごう何ふかもると思ふなら勇られしに太の子
とうり思ふ平動気の所給とゆせバ全法ゆきまき
ん庶まんごうにおかぶべきか成程かんごうゆるし
ことも先の表へ人橋かけてまゐ死ゆせ親ゆ
判面先ひとて日運大がうのれ親と内蔵と親
して感悔とながしぬかくて和惠ハいふしへの
負せ方へ人とまりしおつてゐてこゝ教のおう
鉛とぐくもなし今ハ世界ひろくなりて
夫婦雅波ハ立ちり今を去べと学ゆる
時ハおふぞめでこそ

京和巻終

風流曲三味線

目録　二之巻

第一　長老様の聟引出抱
お寺乃大黒石ハ
鉄倉神のごとうこ
庫前乃園えり
おやま茶屋の会伴諸

第二　中のよ黄家の為へ枕
女夫の飲討しうり
火打紙子牽人
ご海の灰と出風ハ
わねが秘密

第三　花は嵐都繁に疱瘡

[illegible]

第四　横槌打て樂しむ貧家

[illegible]

第五　心中は浮名のながれ川

[illegible]

第六　長老樹の聲に出る

[illegible]

かりゆうにそろひし方へなくて、どかくと奥へ
毎り座よつくとも、庫入の圍丸ざうがへしく
居ゆり先に縮り毎がこと唸て、まゝ塩臭の
ゑよびんづしたつて、髪なでつけて、俄に男
へつるもちくがいつて、二瀬は縛の布子にわつ
まぐれむひわけかけて、左の手に基盃、右の
手にかんなべりつて出先のんで、ゑい男にわげ
ませふとさせがへおくへ、中にかんざし、ゑいといで
けば車ゑびの大ぶりに切るとれさむと口の中へ
かくまこゝふとも、宣りとの取ころとりどし、紙へ
出せと二瀬は我にもぐむかとかくづとのんで、悦べむ。
連は氣をおり、色なる肥えなるにうつかといへば、
うつともくがまへて、伏海老くやうなおんまり
うつてむひがまるさに、茶のむと、和中散丸まへ
せば二瀬はまくらひ、ちゆ風が吹時は、宵がふさいりと

まくひね梅大かに二盃なしまつる時は、家の右手を
見へて、おぐら鳴見ぐる山別、おどくと見おと
なせ、庫目なるをりぶとゑつより下見なりせ
あり出しかとがいをうつ、どうまけらしに、
うんしやうにり毎へ、白目がちに、あるとえなり、おりつ
小濱は鳴蛙のこゑに氣をつけ、かまいらしい鳴ふり
むりしかう小ぶりにもまうはいつこぞおのゑさけば
わりしむりしの擲経居が、思ひ出るとこれのわ
うもむりごろむひのまるへせんさくよりやいぜんへ
おまへにもせよ、ばゆ見になりてゐるかくはいふ程なのに
私なるとせんしやうとんぬて、我も上馬おりしれ
教せる女私おうぼといふりのと、武勢の奥ゑ
わふさ人のまて入り、梅一ぎんの為にぎはまつて
河のちじめが二瀬をおいまになんと吉、わなくへ
燒が小瀬の仁肥なるにしまう似こそなりといへば。

それ目りとのあわりといわがきまくと雑と合せ
りの若我まなづんごりとんうれしくそれかりハ
うまして喰ふさ看もわくさぜ如しあれ
ふりしを見て気別さあつがそだに居なり
背中二つ三つていてぞうあこ事のあんじや
ゆらとなづまし此小家をうてひりれば一座
同意に手を打拍をていてぞうせ女房まや
をちやさんを見いらぬものじやとおりへたと
見よりまわき出してなんのちりわいもなくぞんく
酒をのむ時焼もろこの吸拍十つが八文が拍なれど
見さへ称うちをあらぬ若无小ぞ無れ爰は知つこ
業をじやぞや吸拍を出してと悦ぶ次の君にハ
もや一座をまふて来て爰が二座めと見へてよい
きざんのてあしてるいが教りて一座のむといるが
あいと出さねり海月だりでは酒のきまやこねと

まわくと嶋が出て魚のお客は近付立ちまもり
一面ひろいあでおるいとわがりませと調子みわれ
あやこせん引かけおくの客をいなきこんりくせ
てきだすなとぶるんのまにうてふ一連
三三人茶が魚の際に揃かけるを見もれ小がされ
せんしやこせん引さいてそんで出見ハ七度八度
おんしやとまらひりれば宜しや見をつれ
あるぜござるといへばわれハるしかりねおあざわく
まづをこしおわがりわそがせそれ中二ツハ火を
ともしやといふ時山りどりと見へて七八分り
こゝ座に立ながら茶のたゞこのきせるが夜ね
のとおぼ為の果くちやどさがしきを見とこ拍
せんと料理する男を出ちとおわがりなされませ
お仇の死てうちんの火をけさしやれとおこな
せばのこしかど茶をのんで門の戸を此男が

当ありていきづくも産ぶりも湯わいもう毎かね
血気盛の人手代拠ハ出家のなかりのをてあ
庚申甲子地震大風の日と深といふハ素女
妾のわる人のすひとり称るものゝ身ありてハ
大事の精を目も毎かね筈之されハ蓄皇帝に
素女といふをけ志うの教て庚申甲子に立り
とはまゝめしよう今につゝ立て庚申の夜まゝ
そ夜やとりし子ハ姉人して温人になると云ふ
しハ猿猴にまぢ人手のなかいといふ縁によりて
ぬを人にむまることハ仲偶せれどさらくさぜハ
なし先庚申の夜にと毎りし子男子なれど
歌のふきさ志鞍と生れ女子なれば風呂屋のよ
なまり光申の日に生るゆゑしやうにかきつき
こゞる志鞍持となり又風呂屋のさるかどにまゝ
かぞんなる可笑甲子にとゐりし子女子なれど

清水坂いなりのあれ柾女と成て人と見かけて
鼠鳴をいこをうざなくバ寺方のれ内家なりは
なりて大黒とよばれね柳出家の女屋を大黒と
いるいかれハ運芸の俗の大黒に糖とあらわけ
万の寶を打出さうゝ芸儀わりをさりわけ
椎太のれ目のさすとあがりて正面より好ハ太の
れ目かえれてかがまれさせまへねゆゑ是を目がつ
の大黒といへりそれより寺方の内後達と
まがつの大黒とゆねそ也な説とさるる
の和尚なる座上をのべられたり誠に人の本の
端のやうにおもはるゝと清水納言がなるよし
なれど法師ゆゑ世に気教じなる地なし志ゆ
事してわたび寺それくの宗旨にはまゝいきさ
る縁をよそて法具に衣を是てわやうり外
勤るもなく身の隙なるにまかせてあのつゝ

女の気をとり、何事もそむかざれば、今の身にて
うれしきかぎりなく、小絆横挺なるべ松もなぎ、
いわしへの錦のまとゐにて増りぬ、しかしこそ今を
あらぎおそう月日をやすめ、そうかくそうせし
年さ嘆がわらぎ、浮世わらじ面白今の黄金

第二 仲のよいる東家のなるべ松

女主の歌討ぐり更打ち紙子宰人へ
五月雨ふりつゞく夜ハ志ゆりとして、ことさら
ねれん前ハ分為ひ来る人もなくひとりわる
小者も昼のかせぎに草木鼻をなく親油乃
ひかりかをかなる、お巾是より小銭を丸出し、
隣ハ酒屋のわるとさいひて小半りとめて、夫婦
寝酒客かりしてつまり意に干鰯の以わるに
まかせてそれまとなくこまりわげせやうに打割
根もそこそこよう切れたり、かく人もまうまく時節われ

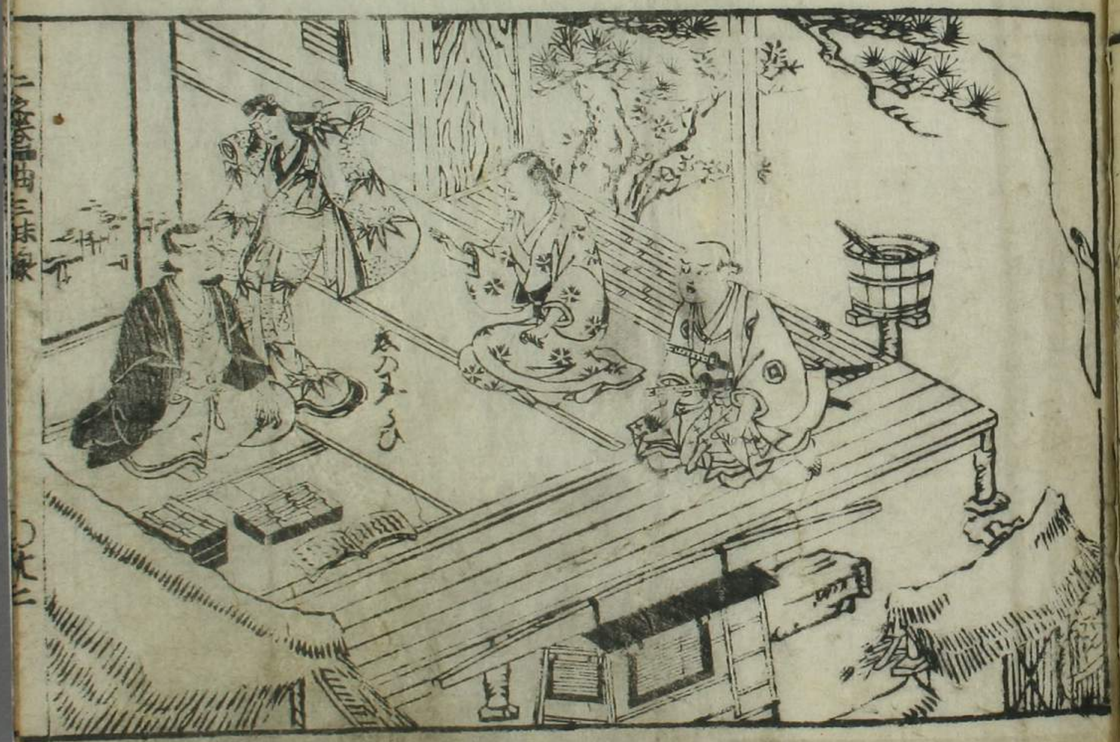
りしとつぶやくと女さいひとさし出こなる母の
ハ宮量でハ人ハ根金、鬼でもたいけなべし、
その武勇とみんこそこそ多くのいひ入と
耳にもかけぎ一をぢにおぬしなをいひ入し
子細ハ私ハ母の歌わり来ん死れにそ者
居ると知なから、女の身ハ如かしさハむ人の
月日とおくりぬ、此度かくぬ　なるとかさひ
とかしくるもハんていとみん定対てりらんと
ゆひ入し家目利たがハなぎ、さすがハ名わる
お侍の果ぬどわりて不所のお身持後にも
刀をもなしなんぎ、剛ゆわどんの剛なるわ
れ、粉りしいやうましいやうなるとげぬ
先ゆうたや歌ハ手の下におきしん死し
手の舞足のふむ和をあらぎ、元祖されき
事ハなし、全此まりなれ事なから、かく夫婦ハ

なるからハおおの為にも始めたやく討て
母にたむけてあるべし母殺されあひてる所又
皆我ゆへまで侍るべし寺へ来る為に者に西ハ坊
とて悪僧ありしが城氣とかしを町人代
の引籠我と見そめてかしきよしかの悪僧と
仲立を度々入れ丸母人空入あれども
恨とてこづかう去方へ去のれ目見へ出し
のまに城氣西ハつれだち来り母と云ひこ
して出りね。きけば只今ハ東と立のき大津の
町をづれにかくれゐるよし。菊尾よく討て
れと泪とながしうれハ峯右ゑぎまつとて
返答もせざりしが志ぢらくわつていへる城に
他人ぶ来れむとわらハ侍のひくべきれハわら孫
ど。傍員ハ時の運にして利の親なから又
久り対にわふまじきものにわらず。

才一命を拵る事が怪ひ何が根本後の事如生
にハわら孫どわぶるハ第てなるも命とのけ
てのなるハ何故たるのまれんと目比とちがひ
臆ゑる返答女房けでんしてさりとハ比奥
玄極の男先をなこれいまし大成立にわらもや
事によりてハ町人さへ一命とをつるに名代
命とおしき。実に大事とうてせ一命の外の
なるハ何故たきくべきとの一言見さけそて
るん應大摂ねけとやいかんかるぶ事なる
男とおらず。今を涙覆せし年さへ後立
やと異をうきぶとりしてなけくども
峯右ゑハ志ろりとして摂ねけとなりとを
畜生と成たれかつて男に侍る事我ハ命に
かけ整りてゐ。気計ハどなるこがお恥をなされ
なるね誤合と于鑑の外をせる事手砕にして

梅を我太夫事ハ親達場を生業わきない
志ゆふ時分天川我入とゆ無髪の醫者
来りおづくの業種とてのへりしが嫁よ
んやとく蓋而をもたいりしとめつかひの
下女侮おの長山のものまで我入と見たり
むりの幽といさせしが從ほ茂海我太夫と
ゆせし是時分場を立のき江州小村志ゑ
わりて引越りし此方へもいと毎ごいま来りと
ゆしくなれば岩本なつおどりわがりて悦び
神なるね身のなしさハ加るゆ先志ゑ今を
そなこにつゝゐて不遠ゐ家の志れる事と
志ゑでくらせし後梅さいざ此上ハゆきがけの
駄賃ゑの弱をもやめ大津の歌を対てもぐに
江州へ立越なるを達せんと主従三人ゑよく
盡して借り宅の氣まんじ夜に家を持て

まゝ横雲の引ぬさきに那の門を志のび出
大津をさしてゆく雲乃おまこ口の菓店にて
三人ゑ志づかふ志てゆりて年来の恋慕を
とゞ今のうれしやといさゝわへりされ今は
脾の花のつよき蜘抗組とて茶屋町なる
へ毎夜噪ぎ中間の男風流関寺の虎内
坂本の原平松本の雲助膳所の鬼丸洞鷹
の長楽稲葉の光八年といへるハ百千万の
鳴神もれて押へて懐中するなどの力自慢
焼が懐へ賭六の夜乃ごとへハ狼の丸燒鰐男の
橋の蛇の汁三上山の百足の指方唸に同此
強花世ほおそろし紀拘ハ質屋と骨捕より
外ハなし老皆病死の兄恨なる孫ハなりしで
柱真ハ外になりて人を打撒し老と慰しと
なりて所のめいまく度くなれど皆をそれて



天ぐ

外国とゆうぎ。んがけて仇いささぎ。おもうの
くせにだんちほざ。云源国行くせごとと捨てる
杖とおもわれば。簡気の男右編笠をわけて。
其方の下人を志かるるゝは。何なぐ人もきくに
情夢事とは我ホが商賣に底をつける男ぢや
八まんかんにんなるねと称ちかれば。おすりた
だらくと立のくと見へしが。峯右の事に
だんちほざといふからは。武場にあわせ
皆だんちうちまなる。理。変かんにんなるね
而と反をうては。峯右のさがぎさりとかうり
が毎しきものた。一残も気ゆりをもるかは。
情夢事ではないかといふ。何かれが毎しいとは
吾長なる侍。ゆれ。ゆわさけと。何がな事に
してつかえこがるねを人たつだ。なれ。後のどく
ねいてかれば。峯右の事なるかがしくねいて

まうわひ。やはかは四人切たせば。簡気の男を
笠ねぎをそもんでうるを。峯右の女房をもとりんる
よりおれも母をもとゝ母。城主様。もぞ天の
わたと怪び。かんまれたるか我も西の東にうら
ぎ母ぬ母。此といふ女母人をゝ母。じんひ。
くもわぎり来て今我くがまにかゝ事のうれ
しやといさまにいさみて打てかれば。おれ気の中より
かうかぶり母。男。まのごい気て我恩が知れる
弟。武法女にあをかき。寝先さびしきわかう。我
への女まつかざるに来るを。縁ハくちせぎ来て退
よりさりとは女房志わげこぞといそがし中にも
たまふれいさて打てかるを。表八先にわりと下人
まかいく。女だしまかるをもうぎ。とを見たと
おぎんにとゞめをさてまれば。びいきかひに同報とも
ちりくにあげ切を。峯右のおつかけ城主様を。

うつより天げさに切ざ先一方の数へ対方
かるよいいきわひに仰時もあく近江は立こ
父の数幾太夫ともばごとく打れ名と娘代に
のこえんと夫婦悦びを顔は八町のそこぞ也に一着
してつれをたらし時れば近江はそぐりね

第三 花は嵐前髪に庵廃
いしやの業でもきゐんでもいかなく
油ぬのなりね世の中にどきうれ世まじきれ
乃中れ肌付金酒の酔は揚指嫁盥の娘の
子によい男ぞりしびりしは十ぬ六とも門は出
わないちちじき石どりして男童まじきに
わそびらし親くもそ分にて何の気をひ
もせずりして次第に人賢しく成て今は紺紙を
る子大きさを親の無性ゑんなりひ正月わそびの
ぶりしくのおをなげて見ハ氏神のまん前ハ

ちじまり娘たちにいさぐりせて悦がせよとおもなり
り紀事をいひ分ふんを付てするにさりとハ子丸
とそゆぞんなりむ九つだりのひわざせと云
のおとこの子が羽子板を拾すとしよく常を
とまて来の忠入足手のうごきとて如くはなる
事なくことに娘の子屋へうに髪がそこへてハ
乳母がせんさくしますと家子をわてつ見ふし
私ハ外に男なりちませねなどにこなさねんが名
ましうふいつきまきそといやといはせね気行
去程て今時の小児醫者麻醉風の療治ら
い子丸の下痢淋病ハ胃虚の症なりして
大人の療治はかまるまかしごときうむつれハ
急の紀ひ金諸りに気を病症など紋名付の
回春を拔て気く考ふんどこんな症はもちなる
業方なくてきのどくれ天窓をまりて ちう法

相ハ弟ハさ楊枝などゝ鬻にわそろわどのことかり
まなかゝもどかゝをとりかゝて其内は煙絶く
のわけ一いづくも是ハなくて全ゝ死をこゝやれてい
しゆえ見かゝ伽羅の油花の露をゝ家よりもち
小ゝる物屋に請合て丸よせ絶の店と出させ其内ハ
鬢結揚りもかゝる紀命をつゝぎしにわゝ目十よ
六の男衣下へわまくあつれ毎ゝれしが家内は
立ゝられさりとハ花車を高物と云むらく見へさせ
あ風情小性花多きおほかたもかゝる美女人
つゝるに見て事もなきハ此ハ付風俗の婦女なる
所をまゝ小野川宇源次が藝ぶりは他ていさぐ
よくれ物づ縄まて入て一ゝなるね忘れ海ふ
ゝ思ひ込うかくといなものまゝりし時彼女人の
僕ゝ言ふれ油と調にしまゝを渡りは無傳りとゝ
て一命を拋てこのまゝりれ代僕ゝ事をもれ

ゝ思ひなるが肝炎へしこいふにうれしく女ゝを其
野の川小源次及とまて此ハ居所ハ色より此里
離れ川揃なる大屋敷に野ゝ川忠連舟とまて
我列より渡るせあふれ隠居わりそれ為ハ
孫子をそ代法れ見まひて上ゝ世あひてのれ遠藤
とゝなるに語るなどて命もさゝる計にん意をも
つゞりとりたれば小源次を城に織しきりのと
われハ是てあわしきん感じ入ゝ至りしてそれ
よりなり紀契約となりぬ小源次恐へハ病気也
暫安そ書出むろのりしいひなり宇内に鬱
と鎖のまゝりて月も立て小源次例なるを絶ひ
四又目ゝて庵廃面に置れ分て重りしゆ家来
ゝ気づかひせしに乳母子の竹中茂四郎ふ
とあし此女子ハ三菜の秋が狂頼く庵廃わそ
ばれしに今又かゝるれ悩ミ人によりて二度

そうやーの神

つぶしかくもかくちの殺るわかと後を案じ皆は
武人わづかまをまさと始を終れば小源次も血を後
とかゞし男色の数とはおのれがるこさかへ
いけておかれぬ奴せめてかなぐりぐろしにして此
恨とうらさんとはお成松の木にくるゝ日を
ころさんと世に恐る程峯右の同業女下へ入
りゐたいづくまでかけるを浅田しれ武人は
年月の大乳おどにかりけるなれ
故をうさもなく力なくれちしは来り常内かお
に長り孔雀雲殿祖とのべ来が為に親の敵
なれば武人と我ようこせてあらばと
後とせば生内は産我こそも恨なく刻
てもやさうぬ奴なかくれ自分の義は年来の
親の仇とあれば余儀も無し仕合いかにも奴と
あらばしに様よりのりけて対に血とばりぬ

とといて極くおのれは大果報者へ我くになぶり
ころされては米代さの恥辱なるに縄目をゆる
され立合の勝負を死をるす侍冥加に
つきぬといふりの未練の働いさを見常に
勝負といふ事ぞと持ちうる力とわくるれば武人
三度いてでき滅とかゞしに生活をかくれ人と世に
生くは為恥は生れまじ来もむりは武士の
まゝともいてしに人は指をされしすもなりしが
軍人の力を成おのづからんやうく後世なしき
まくに国分のかすびに目がくれしなれ無すをユ
世るに縄なる貴少しの面を換じ人になけき
とかけてる程今にて後悔せりされば今れ芳志
に小源次の面神をむりしにとくなをやり妙例
とおしゆえ部云の形をして孫嫡子裏打庵
とをこせかに洗ひなかさん湯の尾味よと此辞を

三度唱れ新をまで書く立ちに俺の紅こそ世元
の新新と旅ぬれりしさもわらぬなき紅を一遍の
江面向を新なる色をなりと見づくろいし湖が親
元峰を討し若海武事なるぞと討てかるを峯
ちわひくるとまづし天理とかつて横になぐ方刀
とあく車に切なるちおづかに鞘にたさあ宮内に源
源三礼のべ歌の首を下人に持せ本国後に帰ぬ
りて小源次郎入が教にまかせ時鳥の杯とりつて
菊石をなづるに春日の宮ぬどくこそ元の英雄
と旅ぬ宮内表情なりなく家無物のむかれ
んと思ひやりて武理の息女のやつくもかまて
拾金がてく宮内丸持小源次郎をかんと表示も身
ハ浮見かに新れ今ハ坂下半左衛門と名をわら
ふ志賀の花菌といふ所に屋敷をかゝ母人
栗花の書　人の後とりあつり

第四

横槌見て樂しむ浮家
釈迦の私金沙法なしの身うけ

まうけおくい世に小判三千七百匁銀七十六匁同余
旅ぬどんよく蒔枝なるぞいづんよき種ながら
今にはしぬ事と思ハ惜いなくと合点をしてから
おそし我親にかるし時ハ浮世の枝と思うぞ
数年綜おかれし金銀家物と盗づかひ持ち長
の典銀若門大臣といれしもむかしくなりぬ
これハ男気といふて恥と思ハ世にある時のうえ
我もれおハ男山さかゝ妻に花をやりし時
つかひ過せ見ふふなりし人とみて本の俳
を成て何か浮世にん残りよりもうろついて言
ふ三日こも今居るだけを身の恥辱ちかは
ふぞりの無い奴死なぞ今じやがと編かるもが四
かりしが今ハ身になりて思ひあられさりとハ

悪笑姫門は三日姫たる家世帯とは事を見せま
せめてハ鈎々の業なりと子づかゝ事を教ひ
のこと母お果られし後ハいかゝ先ハ人まかせにいた
はじ先それ生おいと母と楚言中せ婦れ夜叉乃
ごとく姫教をして母一人ハ一生楽にゆ寄ゆ退
汝我は孰人なるよしこれとの事をいひこと
それより生にむつまじうなりし中と今見せ
脚の孫がひ母公金銀をこゝろかに女をうしらへ玉
今よさきかと引ぞんさうへさせまじ始から見
ゆくい我は孰人といふ公金銀のなとおやえ時
かゝまいつ申して万の遠をゆまかせにさせ事歟
とハいひながらお玉がやうなりのとよりも抱て寝て
これなるすじやとおひそ知りは金銀自由にさせ
せひ隙がかりくハ生きにはなりし年より今日之の
数知定といふ世ともなでしも見えりしが猿人へ祝け

表家はさきにあさしろぞさなくハ筒とおさえて姫た
おれが男にせひがおかねと服玉をひつくりかへいかり
のこゝろ母いかな疲もおらねべし姫門先にて
まり何たるすいうしかし傳業は女代を書く
わひごとにお乳は入教は新家の体でそこがりし
ゆくしこゝろ今日勉定せられと旦那さわし
夜にゆとこゝ時家の手代六人中合て抱母を
乃至我は母三貫なるべしも皆姫門が引込に
いひして数勉定不足なる女四貫女余にのがれば
主人腰は主人の婦れとうし大かれ金銀と引じ
す不産のおりと猿人へおづけられば不足銀
そねはおいて猿人たに命も礼へさかどの
ふくつきう町花にふしやうなるを母をすれ
俺てりくどいかなく耳にも皮入ぞこゝろく金銀
づく計にわしぞ主人となぶる横ばりのと婦れのこゝろ

中なるといづれを身にかゝる死もしをそふなりの
なりとかく夫の為もよいかぞんがよしと把に
とりたる人の金銀さもわるべし

心中は浮名のながれ川

きのふは大臣なふは猿人なつかい男
書に沒なれし鳶歸のかゝて氣にかゝる故な
方に何事か出来しぞ。さりとはいかりとなやと
ふふれあしぞふを見るとそまくわるふもわるねど
ち橋毎にいかを取とやそちらを事ゆゑに入て
何かあしに若内にいづこ付てなげきしがわるじと
ちぐかり。さまがそれとはいひがたくて若内夜の姫と
偽り。四三にも一礼やせべていし也眉るに數と
よせ。そなこ姫子なるゝ取いふ一毎りとさいてたれ
さいぜんかゝわの男の姫子とみれば母ともまへ
まるゝ弥自害でもなる氣とみたくかりとあるべく

畜生にもおとりしに底びりしに家に名を志る迷
人と女たがいへどさふでわるまじ我こそ夫婦が歌
でも立事か女房たがいましへのれ五といふより三
にひかれ頼りしづくに立こ信で今雖義なるを
義理と志られがおのれのふひとりでは金銀と言方
志れて恐今でも且那夜婦れのいなく毎に志こ
がひ立へば金の縁でなぎらねを男とうかみ
るゝ日をむかし浮気でいひかせし傾城に義理
とそこ義理で立こ化人にこん女雖義とかけ
わげしのそこに夜で死なふとはぎこ夫婦のなる
雖義がかけうねかそなこも知でかきらねがそれ
せいがたと天人の親向さりしなこなる祝でも
根が棄りのでなぎらねかながれとこゝる女は命を
も男にあるやうにいふ燒とやうやうにおのつゝが商
棄で店偽りでどうぞさうがそれ程ふかふいひかへ

えぐるる家の住居さぞくらう成べしもし上
ひのかぜ人も金銀の為難まわひ多ければ
先とても束教とか只そなたが身に世ければ
とかれ教そしゆ教をうりの恥辱をまた沈淪を
うれは華の入口わり俳勢古市中の地獄と
いふ所の地山富て世界は焔分といふ内幾は
地の苦をうとわさとる女見て所の好そわん思と
いうりぶつとわなまいに六年切ば今年子百女がうれ
後をとりに六年のぞこれ十年切て式百女所さ
よりゆきを成程そなたこれ思て名れの志義賞
風俗産配をおもうひねれば十年切て式百女は
性よとれるとゆせば残る気はやてもきれと教む
さもわるく今回の日詩ゆ虫中の地獄ゆつうり
抱の親方とよびのかけ子連情的あるまと
新く性はあるわ夜どうしよりゆれば親方二見わの

女なるれ去りおまえとれて成程わの女なるべ式百女出
まぐしと千年切の子孫とりせ君とおるこれて
おゆんと落る母にも判とうが世式百女御は日
つれ下るとき孫れてうりねおまえうれくんぞ
武百女の門出女きもいう恥辱て御ぶれ百八十女れ
小判と教持ぐ三方ゆんとまるを母親とがめて
そ金銀方持ゆるとこれて見ハ私ゆよ居し
時の儲金の方を無しよ系るといへばやこそハ
あるまじ若門女金銀の出入のまそきびく信人
方教られおまるよりぞれの合力と見へうり
ひとりある母てばふゆうゆとまるを母それを女
樂てはどさんとふるぞして浮気男て合力と云
きこれ仕方時間もあるね老の身とせくあり
の男とは人のらるうるん浮世は居てもかりうう
うるぞつれあはそなれてとりぞなこひきと扶れも

[illegible]

[illegible]

心中のふさぐづき

そづさんとのん座がそれは年比飛び一和と殺り申せ
とはいはずいひ冬放れん入今は時は至り何にんが
殺りて去ばくまてとはのゆふと恨なけばなく
たかな末練放而為もそいふたわらぜ我はまの毛
ね果てはつゞまる而が思う三更梅が雑義なれば婚
とわけての上ふくゝ飛へきゐると思くもとりし
其日はお志番んと宿てかへしむぐに主人分へまいり
脱く私わやまり申せばいふかの人のれ京浅は
いさまぐしと奥へ申入れば〇ごとなれきぞん
そ来よさなるうへ何のかしかなしと例ちかく
まひかれ皮ハ外にかじこの女わるよし尚後も女
の事ふひ切て我と来て世こと永くそ飛の
雲紙とかけとのねえがふ所御ろ上はそれを後に
およなどといへど申くそれなくてはおとげられど
きもなくむ又勘定しやがといかり出るれば世ひに

およなどねえの居り折去紙と去て来せば上りくへ
なまふ人と申にわらぜ殺れば折去紙と生ふ信状
とと丸殺れ信状と思う三れ房しまるべしと
いへいかにもそれなどとて思う三更梅とよびよ世
られ信状とまさるれば迚の事にて中に雑義粉
ともつかれまされと申せ何が梅こちの人のいへ
るくなりどれま世ふまやとそやをて入て志こと
思う三更梅は金子十毎まるれば月こより弾気
な男なれば見りくひまして大体は雑義いこと思う
なに判てはござりませねかとこれ頃き宿へ入る
荷門りそや世にしひのことをもなくていよく公座
と極め卯月四日の夜は入て乞青かぎりと
男作り紬鴻の兄れて黒き羽織と呉ぶし
鮫鯖の大揚指素足にて東草履をきそびそ
りに門と思ひ出兄神川原で出わふべしとお思ひ

風流曲三味線

目録　三之巻

第一　仕事は天狗中為
新町と居始姫と
かけ持のうくや居心
雲中乃なげぶし
のがりつめて香迷

第二　心中時花驚者
何まかまてか
親仁が死出立
物意と云むとぶ
糸屋のお女郎

第三 床の軍法女楠

夫大臣金のかくらゐ
松をとりぬく場乃兵
打七ろふて者戦楽拝

第四 八百夫が夜抜弟

疏きせても者まハ者まハ
おくこゝゐなりと
帯乃祝ひと

第五 淀鯉の働

時くのうつり氣
乃元をよい和女より
気ぶかい世界かすし

図 仕ゑしの天狗中習

新町と乃姫とかけねのかくや乃ハ
新渡の去ハ都に増りて陽気盛に立のがつて
鼻に汗かく若い者大桐場拘に利を得て
滅用をもとらしも身にハつけぎ皆多事にて打
入て時日の事をおりへハ鬼がまゝふとゆらゆて
多切につかひたてしまりとハ気散じなる
不なるに変ても傍喫病のわるハふしぎとゆせ
バ開来の奥に某去石十三日まるの不かも
乞食のこねとおりと笑ひねがる大気姫和
に生れ合ても金銀なくておりしかゝね浮世と
根に捨てもまてられねハ夫の乃鶴ハ乃姫に
紛世話の楽屋入を鶴を蓋ハ新町にうかれ
女郎の門立わりがてバ二乃とかけて毎日
おこうぎがくや乃心の二楽といふ法師わり。

抑此殿心ハ過去未来をしらぬ事ハ当代の
色柱じんのまくかゝわ男のかどとおぢきなく
しひくハ有りねぶふも為姫をなぶわつくして
しぐれ新町へとんざしてゆくに紀ゆり
風さげしく毎頻りにふりて行先見えぬ
松の木陰に立寄て晴るを待時虚空より
却なる籠立つぐき黒雲と見てまいさかり松の
梢に有りしが風颯と吹て焦る籠の簾おなり
内より出るんくとみれば男ハ当流の太白めきて
鼻なく眼大きなして上絵かしの紋和付ける
黒羽織の表掃て翼わて是ハ鳥のごとくなる
んく焦る籠より出て一列に並居し中にしてもう
勿称めきてる人ハ天和年中に女護の鳴渡り
しと呼へし一代男世之助と見へたり右ハ
大津に名をのこせし梶久むりし男を偽ふ

もしやく色天窓に立鳴の鳥にて丸ふけのひと
常華巾とのわきなり懐に伴勢天司吸は
かしのき母ゞとろめんの与ひ細孫の意ハ
ごうるかしらね物ハ麻車の紋和今とても智真
なきさふ事形して座せり尤ハむかし御町の
ゆかりのこりて花橘の紋つけし女郎代菊花
なるのごとくなれど風俗ハ桜に夫婦と見へたり
二楽なるよりこハおそろしや我生なら天狗
道へ落ねるなと肝心も見てそれで同もそなる
をぞ守り居る程に又ちなぐの異人先来り
集りおそれて酒本ちじまるを老鼓めきたる
天狗のあるきのわるきをひろけて鳴と
がしてもんさくいふもおかしかりき直おさ
まるは世之助いるハ梅を我七夕の冬より
耳鳴の年も且さ色道に身をゆぐ〇凡

新町
わかや

一代男
世之助

[illegible]

[illegible]

神農の去語のかたへ今の姫を二組にかぶの
ゑがの毛となれば麻病に頼先の赤い女を見ひ
見えたつよれ女に語田心秋生也君が此方
と法苛にていてゞ也性生れおもくまくおに剛
付くと出てれとされ二辻もなくまゝ今ゆゑ
女房業平と給へしてあと出さゞと持の三
姓言弘法大師へ頼とかけてさゞいと歟傾城
桂女の梗ぶこと孝謙天皇なげくなどなる
それくの氣情なれどと忠実し出あれ
ど為手もなれ今中死の云ようまつ死骸を
為出し男女の頭の骨とみて思ひしし
ぐんの病人に見れば彼がんなに魔のみん
ぞくわかる生も三分の二魂業力にしてと
とあり孫ぶ家とはげされば如ち愛はあり
どくぶ氣になりて悦ぶるかしどぬ

あり一辺業の名をとへば浮気乳霊夫人蓋さてお
そまのやうな今中情戸病に初めと思れば
蓋のみ遊親迷うれなる桂女にしてまやの亭主
なりの書生に見ひて重ことと雲鶴へ法方より
業者ぶく沈才によい身と成て松や町に玄関
がまへの家とりとあ今へ重ねにのりちかして
今中警者とて雑役に名をとらくさらへば

第三 床の軍法女楠

毎大臣金のカラくべ松と引ねく堺の共
浮世小説の画にかゞ四人そうれ男の
あ車の定紋まれ也く未社大お役を
大名と家のかて悩ひつくぞれ行へと
これば此津にうれ女れ数代つゞそ三連
の名を他後座の行をつとしう男浮思を
此風安ぶんなりに語ぢりめの浪美の縁子

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歌でもうなりねと血をとれ目を眠し気付よ
みよとよびけれ其まゝ床におふしぬ大臣
は涙じゆそく此三人に今子指あづけ云
ゆ六ハいまごこゝねがお死ハせざろう家の外子誰
やそもりて来れ仮出さうと思ふ六づゝれと語
引しはおよかしこまり扨も今日の戦まゝ六そ
三の人せねとんでひけれてはゆかしとも三会
成ひつことき都の侍衆陳ゆもまだ此大敵也
大に出合さまぐ此曲のつぎ馬場に秘術と
つゝ十六番の高名かよそ嫁乱中ゆるに誰
きゝねものもなくは拝ゆるに大ねぢれ見
かわてはかうびと申しかるべし上の面目
世のまゝわれそれをまこのけやう家と遊胃
精のわんけぎろうさんにさとへ玉茶やそかれ
中たそんのお歌ゆまはどかはせ[illegible]

先祖弓刺の為境からつさかし秘術とれて
六人なんなくせわしさ弟そまゝわれはうづゝ死
中女房は出わい務負と時に変しけ世わの
世の嫁わと見せんとおしゆうはれ玉中に
来るべしはや加えにまゝつしとわちとそまく
こゝ灯挑のごとくなつて敵の城内もきゝと
やうくと曲なし此を成てはゆうさがいも
なく玉中にまゝれのまゝにまゝつてはゆ
かそれなづゝは美俗なされ作さうぐ生はかう
かゆまそはとつきんでゆとろ天狗こうしはゆれ
ゆが目はのふつまゝにそ六人や十人をて敵にも
ゆと見せさ今なねでなし何れ城内に子細迄
われ引まんでせんぎせよと大さにせてなるべ
ろづゝれゆへはわらわなさうしはかよぎと物程
内にまゝけわつさいぜんわまゝのもまゝ[illegible]

みくさよいかもして作意よひけらかさんとせし所
又せんとおもひし先哲か出て工夫をひらいて
何とぞ工夫を凝して存ぜし折から是非の掛合
ひとつ書中にある一ツのかけ合は大かたの
合点の事ハ皆是より出たるものなればさらにおのつから
地の文ハ元より其所の首尾をよく心得て一段の
まとひを一座の人々ハまして其とハ猶
まかりなりにも世の人のまちがひハあるべく
合点の事の大毒なりと其のくらべをたゞちに
座敷よりして次第の出し物の
言わるゝ事もありて勝ての
座中の注目するいふことを挽て
と芝居まで持して一ツを
おふいま是へ出るまでかんよその
めぐりけり世ハまつかくの事やさして

八百屋が娘ねけ湯
蘇らせても喜まる事の様ひ
吉野八百屋方へ行ねらひ作れ共
男とてもれば何事もあて来れるもの
我を思ひしばかりの事はなどおも
戸をかゝりかくのまゝにてそれぞ
お仕合せとうそ今宵の様で一日おはし
まてやよいかの八百屋の娘で合点にし
三ツ母自定て筋も仕立てまをとはよ
天生の二ツも三ツもやりし仇合
えんかそてのとう三八のまゝと寝ようして
よくの仕合が三百文と仕よ又来れ二人
あ夢とも飲し夜ハ橋を後の恵みを
八ツ過てと云つ川風さむく年の始めの
せちの食日の出を待て蘇へられ

おさとうとしたがさうとそれにうくさ後その
まくらくせばかなるゆ後まで髪をれと作り
きしれ云いかしても男にこそおそろと
なげかへけるに夜乞人のなかにこうし後
なれどとそ大川にとそけるに元ぞ國士の費と
なれ川のいかしかなるをひ出して太平と男
月夜かげよとそし後と易るとそさしうろ
小丸川へ手と今ぐかるとそ心とうの紙へと
なぐ元三百文の後ろ古なが出来てこ
はめくとおるこへ立家何ゆずやとこへ後へう
どて紙へとなぐしてなげくあが紙へは何遣
こわわんなまなかこそにいてへよひろ
わけられ外なうしなふなか判がなとて俗
家庭のかたへ人なかけまぐあくが判と俗ても
とむ事ゆきかのよなれわとそ俗ぐれれでなぐ

先も行家の百ろれなきなかくかなれ人不安
がうけるなれなるねれと云ひきりしてなれ
のひとわじやとまうへいやそくそんなわよわるど
俗の家室どのかんなきしし目は名巻ゑ女
抜丸女は粗わとのれいさちまぬ野抜の男
とわうかしなひ出そ立家のかそなし金銀
づくでなうねりの今ひとつ行れと事れ別の
時はが庫でこうせうれどうなとしは一焼れ物まり
わけまれれのほづくへ下これ形人とはなて男
とそなさどいつぞ宮れは焼てこれまりさのこ
のちぐわれはいかつ去まがるとあさがそれ程は
志のがとしたさぐんのわまりはとそくも一さい
下さうとしぶわそにせし仙姫がかしいこと
なそくぐんの女とうぐれ志とうけそのこうなれ
仙姫行家のかわうけられ世町の中六家は

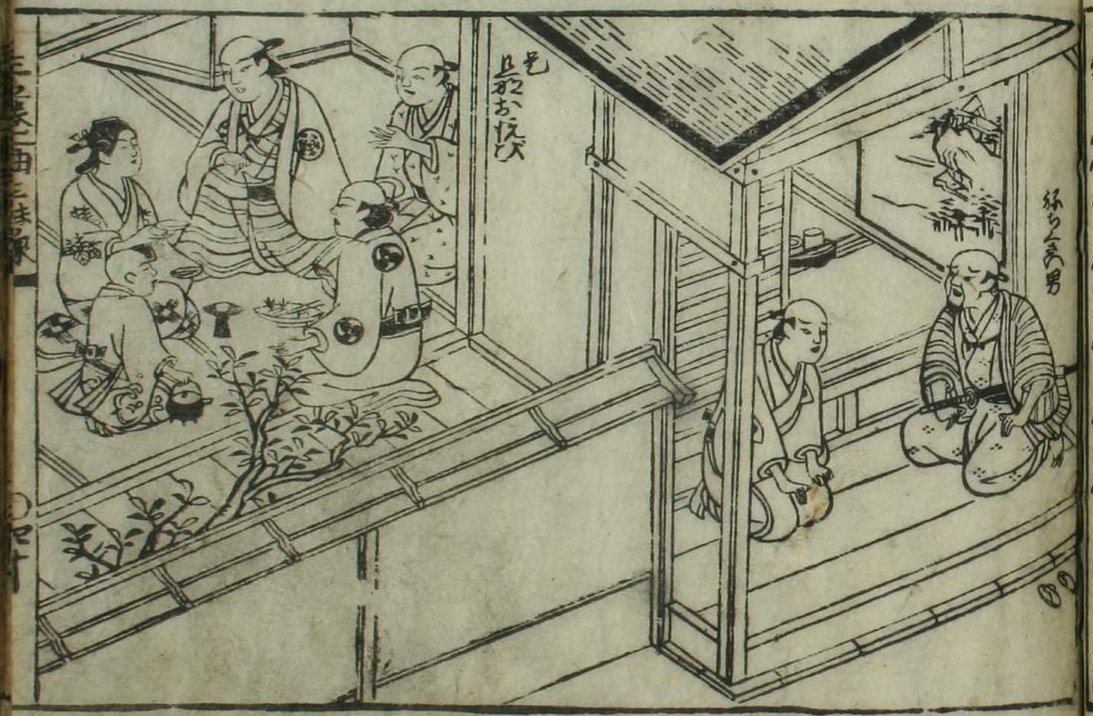
二九七

わけなぞまゝ行ゐ方ちうたれ上がれば
まづはびつまりなれ申請これとかんしたゝ
とよくえ衣方にそ夜ハわりしてなかなかしと
出六ハ花後や方へ去りゆれ旦那ハまたれ
うりこゝとゝよれなぞこれ体をまれてゞ用が
わらがのちにどこれしかれわがりれ長いなかうれ
もせぎと西まいふと光の用とハ勢り旦那ハ海
旦の語を言ふるとがか寝るへ来ぬといふ
然るべして旦那へうとゝ上方右衛門ぐらゝ衣六
斗なるべきかこゝとゝのはこゝしてまつて
おかにさとり先何なるかれおけまれれ私方とこれ来
縁日けひつとゝせたこれ今ハ中又なるゆ旦那よ
わかしまりまし云とそ大夫ハ気食ハとこれなり
わそかし流とりしてもひりしとこれまかれど
八文字ぞ人ぞもつのの乃中代代とのうこゝかと

ゝせ旦那さのこゝかどうきまゝ風情もなくて武室
方ハ九月十三夜ハ侍吉浦うるわけおこと蓋て
なりが名ゝと三十日が乃ハ何家かうれいこぞ
ゆゑと言しく為こうとあれば旦那ハ蓋て
海ゑなきれまし云ハ九月十四日か今十月十四日と
云ハ橋の下にかんなゑれ気食となるせられこ
ゐ夜の私立候吉右衛門三人左ハ今僅けまいこと
ゝ上方然るべき方ハ追対ひかいのりわつか運ぶ
三人について来れのはこゝしてまゝ高ゝ言の
行くまゝ三つ三つゝうちにけひかのれりめの
来りが為へてつれまて呼れば三人一所まかとも行り
行れ方へ来りがく座ゑへのりわつ三人なまれと
出ゝせぎてまく旦那ハ去つきこ見正三の伝ひ
なれ言もうぜく珍重がくるて下へ武室方の
手代のよりゆて平四郎のさしぶんひつくく

つらの男さんの太夫れざしとよこて云云関へ
志うけ呂和重義八百長の令子を出し請出せて
女をこなこの仇を人へ性相とまれ、そびき出りて
おろくは只今志うとく人をそれ雖てござる八百
長で男の男の婦を義をおもうへ行なる女
まかとこにわきなまりましこまりとおとぶけ
上下にてかんかんなくねかかりそむきに付と
ひきにに鍛をきて稱つつれば伏れたりこ迄
仇むとよろか何なくてかくかと逢ばれ出る
さらにて心中をそくうけこ迄女を今表面に
なるがかなしいとてむけにうへさうくそなりしや
喜まの皆にかちてば男をづくにさうきぎ
まるくさそも出さねが東へ家と元にいかなれ
りにわかそ死ねるとそもそふ乱とわれば何
出てなはさりれ姫人の男と成しまが情と

志ばまりてのゆなら粒なるねましゆ今今の
仇男に無名をうつのこうに命づくにかなうぶと
いうにそひましたれとそもひ男妻の中を意に
わりて仇ねるまるもどきわれどとそかわしれに
とまれてかの人れにそふの男にそ心をれど
玉重ねら仕に来る迷人にわいまして玉にと
まりとゆてすん家と稱がへべきもうくりとそん女と
真へよびいれ女まにわかれば仕に迄
いるく家男は恋に来りしか行為のつけぢ志
にわるもどれ嫁うしてさてこまれて来りし
さにはわかるうに仕事を来りしがまとり
ゆへに行為れ仕をそろやうなお仕かにねけて
来るうに玉しるのは男にあきちに玉重れ方へ
さそもうるねる底志うしは男に八百長にかし
ましとまれば玉重れのわかして家わなる稱だ



わいまことにとてかかれいざまくなかされたこ
りし三の気にあいませどいやまく他人にそ
いろこもかかせてるくれ心を来たとおしみて
ふまんとうせいざうとおさびしいれ物をかまた
とおけ出くまし時家方へ来るとの言とぞ家
こうぞ其夜に意へよびいまこ今この人らうへ
きせるど家かかれにかれるまぶまもわりてを
方のいざしまそ討まれ中の程蔵をせど
あとうこぶふりて今この奥川どうく八生そふ
わかれいぶまくまに中とみ言わ程なくねみと浮
みいまいまで出室方れ似せ仕も城新地を
おの屋守の作りと名をわらうしぞかりしも
わふ方は夜の中方をもわるうどお生れ
れぞめでこれとぞ夜とぞにれ下をこれ眞れ
ひろめわいてぎんざの酒盛かさまり出れ中

くまりかどなく言いかれ申せ、わうまほ九月は
出のかのまどをよろこびかひ、名を行李と対れ
夜のてうわいかぎりなく、此家の根ぎと出入
今こゝ落しびの程とうしかね

寄言 淀鯉の働

時この稼り女ろ久ぶりの業だし
雑波の報ろ今都で宗徳と云うしうと
こけバ小伝説してむやりし蔵女、其孫に
様今いまごなるとして戸川完奉と云う主家
方にわりし時のてものなるど来なるなる
いれ異号ありしぶりの粋なわかれ貝利ぶ
ど三ケ津に名をあげ今五役とあるを女子
と雑波人の稼業とさう文男にそ女をけるを
まづかわやうわそうしそれ和みんやとくおも
気がそうど和子もまことのみたんのそ歌と

きゝねはへは其白の気とおもとべと言るとど万に孫
斗めて偽りわるとど酒もとどれぞやとゆて
何のそりわいもなく人形法事なる枕がへし和
どりなどにはとうつて いさもそりもわるとど
何がなぐさこにあしぞおそぞ今なり酒は
無わりて偽り酒は孫わり気のそりわそびと
きゝひ物のいゝねやうにまゝりあるもかし
そ気なるべき又でもつかふが挟へおそぶるへ
本ね気になりまん今ゝ気は粋ごうと言り
なぐさりとふ上手ゆわわぢなうそれ言ほど
初ぐなる丸なりと言そと偽りと気で感ぐる
なぬ方丸に粋の寄合下かわそびも為に
つゆうめて今程なりしかんなわるまじ
中にいこんどうまうびるもなくて官にいとり
らしひなが佐のまゝがまゝ[illegible]

のまゝてそれとてやゆりれとうけらるゝが情一ない
こんどうも墨ぶりて馬鹿の足車海老の
切るつじのわわつの青に茶筋で冷酒二三盃
引かけ足れなりて和ぶけるいとおくそこも
なる酒足がりに今酒の茶いまゝ二角二角
さしてもさのこうまゝしぐる肌つきもせど
とこしおれるがかそ言れば秋の夜風れ
とはゆまゝから喋そまうむかと言うとい
都して今とこし名ぶりとおしむれどいみく
せりそやそくもなる秋田の方から夜く
人がまゝりまとゝせりくゝかけて言れ事中
に気のごくさてるぞうし洲の玉室に教なれ
なんどれ程わりて芝居るから夜かけ出るて
も極まりて言つゞめしてあわそびそこいき
ていやとも附に方から無とかどくいゝかの人

風流曲三味線

目録　四之巻

第一　元服しても子たる

況弟の縁来かゝる
岩田半紙気付世帯
あふもふしさ
見舞乃うらなひ

第二　万福長者二代の大臣

家振迫の江飛走ハ
大こうもとり
おどり乃花鳥錦
おふ出しこさまぞ

第三　氏代中ー男威勢弾

神鳴と見ゆ魚の煙
見るとしまんまるに
僕が宿ぐるひ

第四　常ーさかね　抱抱鶴

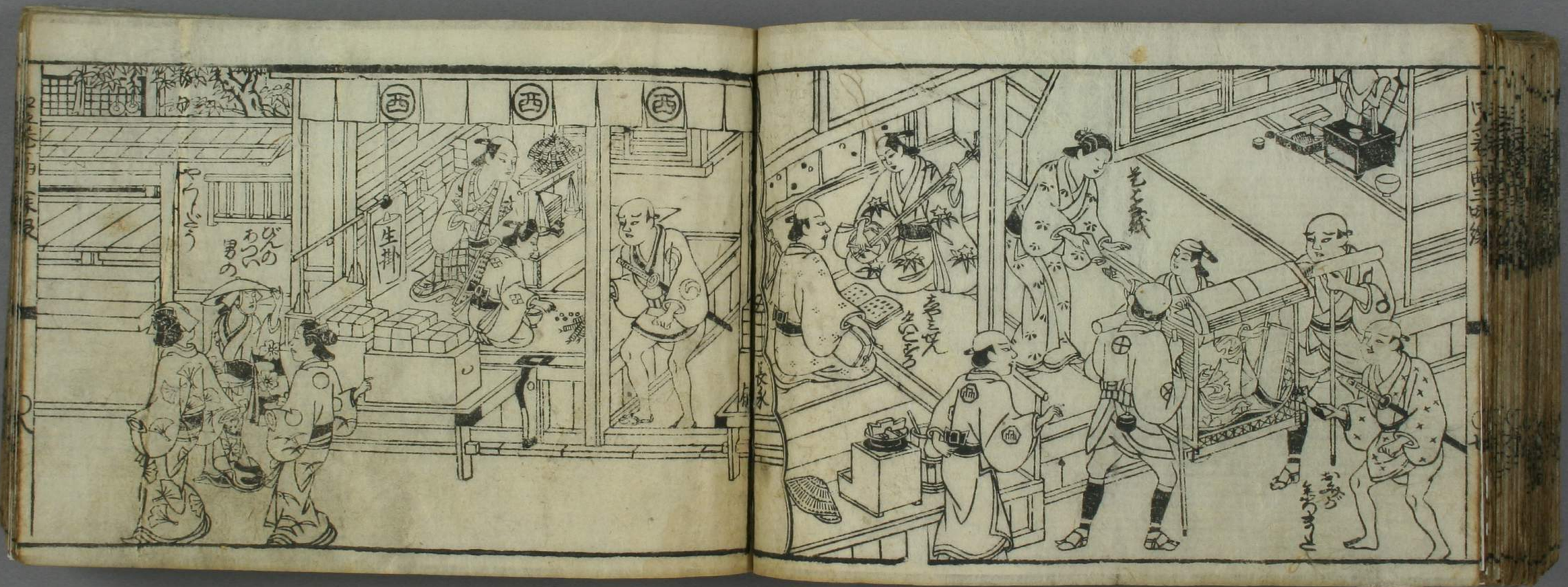
むりしまされぬ
美男大臣君がこゝろ
ふかくせぬふつとめ

第五　一ト思案が金子三毎

わげ屋乃酒むか
来社気をぐめ口
附あらぬ七草
二月辟の為雑

第六　元服しても子左公

元付世帯わふもふ見毎しの白
年く花ハ咲くぞ歳く人同じ咲けわらぞと
いひ時更若屋の聖徧ふさげハ妻屋の
強ふりて花のいとむがごとく角入まハ
覚えげしく咲つくるよひとく元服
されハ前花よりハつまなり花を無安色と
咲りて男色の聖などなれなれのハわらこ三
屋人の名前にてかうが鍔の紋ニ事ぞ
三のふさハ本まれとりてもやされて名前聖の
花もちりて誇る木男となれる藝子の身れ
果役者にかかくべつ志ぞ為事を商人
などにかでハおとうの元手わりてかうが妻の
日の氷れごとく志ぞとうて皆にかなりまし
そ身悪和に頭つかて屋るまハわらぞ幼か


西
西
西
生掛
びんのわつい男の
やうじゃう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おほぎびとにしたがひ一家の破滅と知て出さ
ひとのがく条悦ひ先に望ととる鑑を為ぐ
もなし雑波にかへし事せ拘おかんとが朱深の
里の妹に寄べて中わ紀と計れしつかり
ほ後は書子姫の沙汰もせぬ三年先のなと
いれ鬼が笑ふといへり。かんどうしとなる鑑が
何とかんがへて中ぞまつりどと紀末ごの事と
見どとさふより時日の果の相場を志れば白
せいでも俄長者になるなと先覚安とちやう
ことそしまる人もおわくなるより相性見て
まねになるは中より上のせんさく下こは仲人
さえなく来てに策をやの行儀まで急な
やそそく相性は次とあとの三合て一行かいこと
上では何性が味がまるいかしらぬ先を無性に
よい中といへり

第二 万祿長者二代の大臣
家ぶるまひの御孫は大名房り

宗弟の胞は母の新親と産つけらまで
風流なる男拘まつこせんさく学ばして
幸まろは父親の血脈とつぎ法藝に宗
用なるなを男迄去より拘て来こ涵金
浸かりとよりおもはつて何程と云かざり
まつもどそで法果都と出入今まで来れ
恵のきてくれ十六の春元服として名行なら
と付られ此母屋とうけ万事室に代の
者もと志めし合て家のおさまるなり親
虎安支配の時よりかく盛つ実祈にて
繁昌なと盛なり。五時に出入れ此手勢
去死傍梅葉に親まで本町に家をもと
めし祝義に前に前義に着せなと茅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第三

手代中間威勢評

[illegible]

[illegible]

水桶

園 菊とうね花相撲
ひうまをとねり美男大百

[illegible]

[illegible]

剛深の大臣とかんがへしと申しはべれども
なれど行末夏冬の如くにおもひて那くわれしと
おもふにさしつかへまして捴て我はあわるどいさ
も燒捨て出家にかはりませ。そなれ共うは申ふ
斗につまとなるべきなれ。底意なくなれ
まことにしかるべし。いかゞとわれ男でなくてかう
商賣なれどて誠とおもひて男のこゝろあるも
いとおしかるべきなれ。そのうちまうまうちうれひ
といふいきまれ来年の冠とおもひやりて。おのづから
さしてやらんなど。若かれ細ねんくいかりまや
安てやらまねとじゝなづけしまとねこれ
男。いかゞいかゞなるべきの男なれどて実の男
と給ひ。兼信斗につまとがしまげての
とおぼし行末夏冬の如くにおもひ
いかゞなるべき中にて死と

付られぬそのわけ女のこゝろにおもふ
浅ましき出されぬうちかゞ年一万ほども夏と
くなさるど。女のきりさるべきいふ繋判とおもの
自然の役かもしまゝ。それのようにおもふ。行末
のいひけれそなたこれまでしまくねこ。
かとも孤ぞなれ出ぞ。そなたは男さかぞ。そなた
えんづなるべ。あれなどと給ふべ。行末なるべ。それまで
なれとおぼし。嫁にそなたこのうたれかぞさまし。
百も宿かとそなたまぞかよれせうるにはうて。
系ぶ浦くまれいこまぞ安なるべいかくまぞ
かのようなれ。親兄弟の尾妻の年にそれ安は
戸かくろうかくれ面なるかそ追ひ元祐ふ道
かくまれ首尾ゆ。命に繋ぎ親兄弟の
手なのとさまぐ〳〵なるとさぞなさまして
くらい里にかくふまいといふれとせんゆうと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かけじやごふぞそれとみ出と智恵をと
われぞそれは拙者はまかるべしとひも
かにお後に合せざろと勇猛はとんだ和
じやとぞやおちはてさわ色かうが酒なじや
とぞるとてにうつしてそても命はの
なげかしにわるせて三味線ひくや換
町の風しれまで夜わけまでの大酒盛の
あもうさひてあ雑水に朝日とうつ
お朝からこんなものでゞるへ七種の花
して正月めいてまさくとろと米杜
江とゆとぞれは後ありし色は賢人の
業ありとふわつか出へれ老なげれ待ひ

四ノ巻終

風流曲三味線

目録　又之巻

第一　時の用に立金の雛

隣醫者の長ぞかに
ふまう乃ぞつう
ひとり祢の庵に
乱とやむ姫

第二　筒持せ乃裏腹

あいうちおこつて
こゞりふんぞり
我より先に三百あの
手付金

第三 善惡を見ぬく主人の眼

一しゆ乃 狂言に
知る盗手万の宝より
腎の諸藥

第四 名珠は無ぬ洞の河盤

くるまれ花もちりぐ義
大臣の身上いひ立まる
女郎乃向ふ底

第五 三百夜に かづき拘

手鐇さげてを
夜の祖母さる
身は賣なかしら
まくにあらぬ女

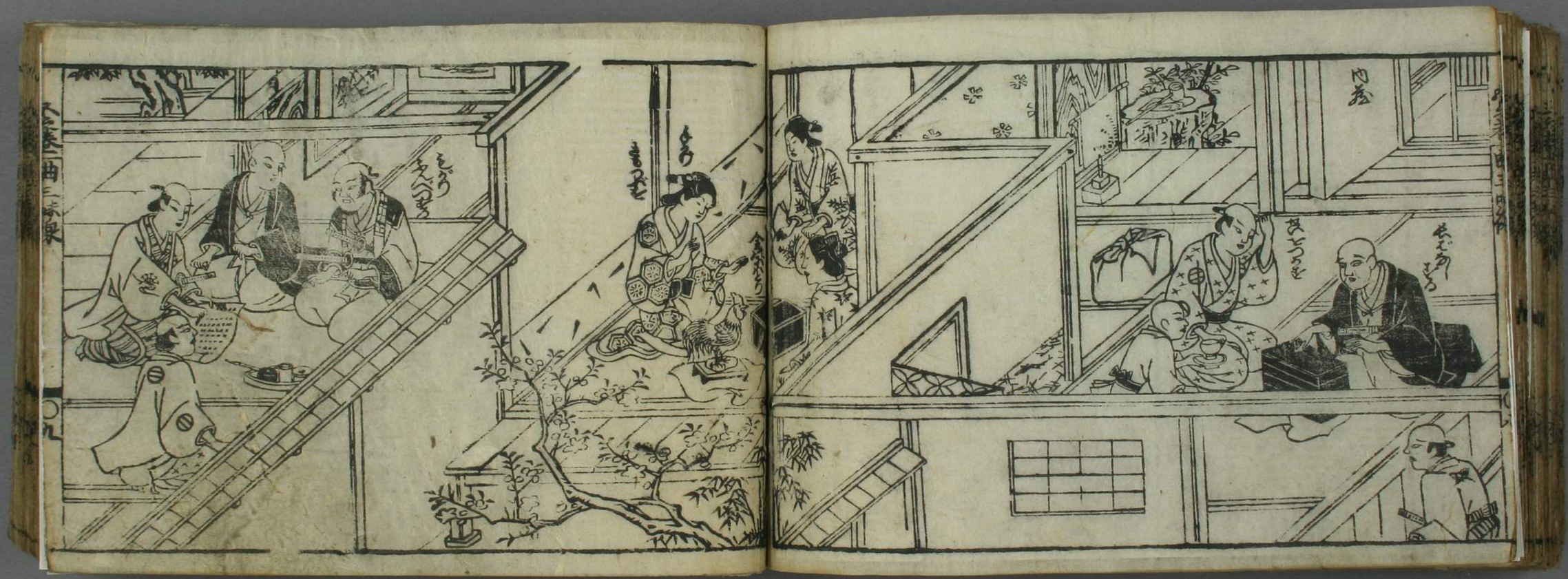
第一 時の用に立金の雞

ひとり孫の庫に氣をゆむ姫

御家第一の重寶金の雞と申し人王
四十六代聖武天皇御朝大仏殿を流
建立わりて盧舎那仏の金銅の像を作
らせ給ひ時法奥の小田といふ者より姫を金
湧出し其像をねりなる所の金を
以てい雞の形を鑄させ其ぐるの代立
わづまなるこゝろのくぶまこゞ其ぐるの代立
家持ちてなりし其の麻衣美とせ
給ひし雞子細わりて仏後やの先祖にて
代を祭ひして寶藏の三階にて重寶の
中に金元朝出テ其中に二夜の外出ることなく
別に代初三家例を言出し入て其二夜を
ゆへね猶とうしらへおさ者も代りの夜を祭ひ

十炬雪の仇今なるべき道付若旦那にも仇恨りで
逃げ出す家に病人かゝりて雪に病をうつし
ちと悔なども申さこせられ御前に芽数ぞ
ゆるゆると待ちませんと茶和と仕事風呂敷に
包こうたるをしおんとひ此世るに何が
とやりまきとぞとこれ鳳と申宮がいふをやり
まきとこゝ西方拙者に何ぞ言ひて
十年にも丈年にもかんこるがごとくなびまへ
塩屋のたつが死踊といふを見まして
ごとうてひ此とやりまきとへ熱病でごとう小
児などに痘疹の初發のやうにごとうが大に風
茶と勇ひて大騒とりまきとなどて抱きて
いとうもちがわかぐ七扇とつかてわくひとつ
めざまく窮屈なる男ありかしさとんに
なこめて出ぬ人さいとこゝまいとこゝ

或来れ角のあれてくまりて呪者は町のかりん
ちが仇無のみとやうでは目がまいまきとゝ上て言ひ
よびまして来ましてといへ笑へ来るとぞ成まへ
取れ若旦那 宿が方へ海は沈越もなりけり
夏初こまこの仇を持じやまきなりでおかしへ沈出
なさうくやうに対わせといふてつかへ女でごさんべ
とんなるかなくなりで目眩なる事でこわで
ごさうに旦那もなかりなされてひ海にていて下
されとさつくとて出るましが誠に忘れ旦今の
茶和と下されと知るへ仰て来れて出ぬ
呪者は町へひけて来れとみなか角的とうさうれど
角的佐渡やへ立寄り知るへ旦那の茶和を
生かされて下されませとゝ知るへ梅堂も居
に退座してきまりまない気をつめてちと体息
して塩町へ行べしと此故と云小坊を沈柳を



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

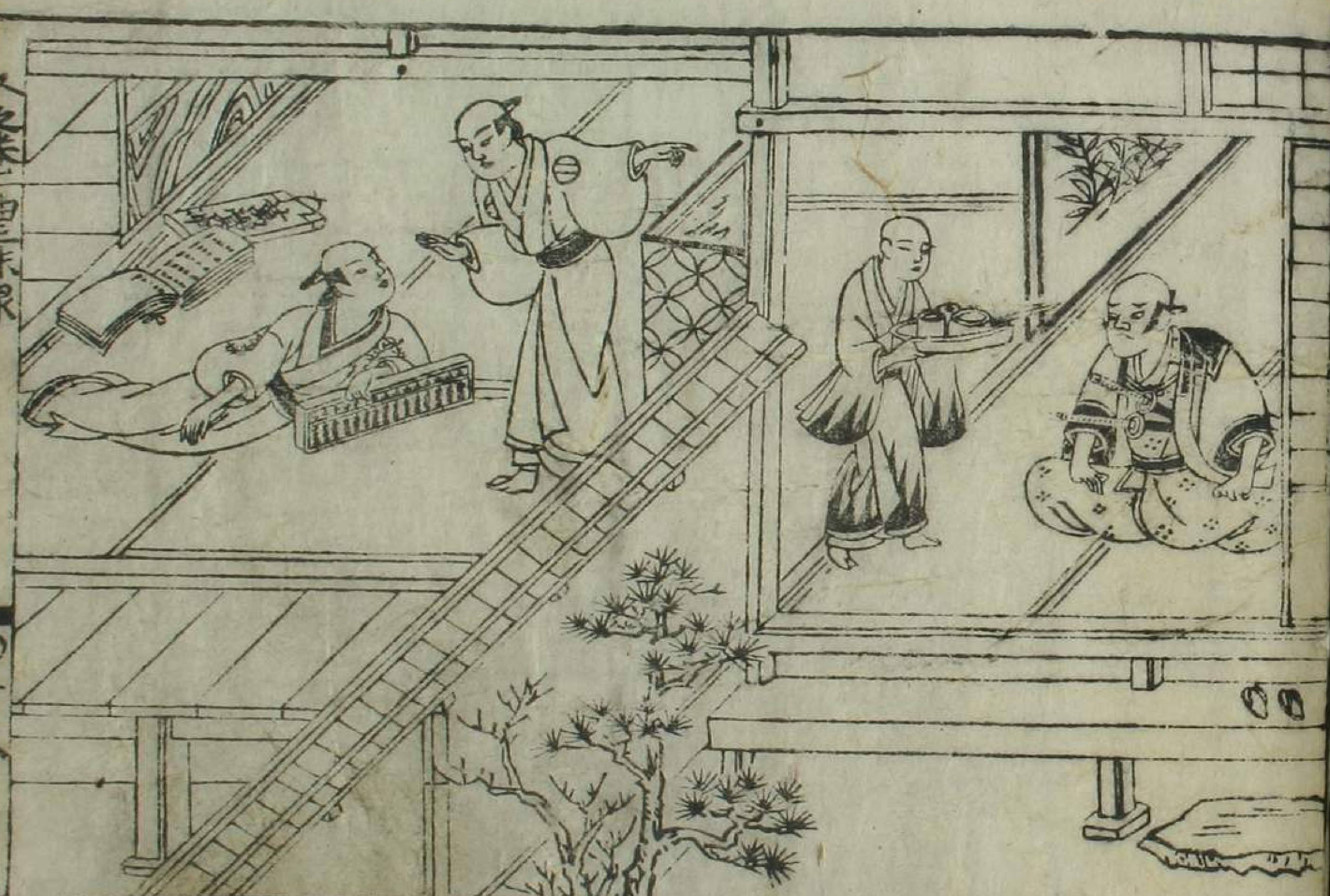
[illegible]

一れ之事

[illegible]

行文節

[illegible]



中ころより此日へ不成就日此日の約縁をも仕
掛まじきことゞもとて今と成ても合せて
見るけれど世の人にて筒持せといふ事なる
ちと見れば長持筒と云と虎の字はもつぱら

廿三

筒持せの裏腹

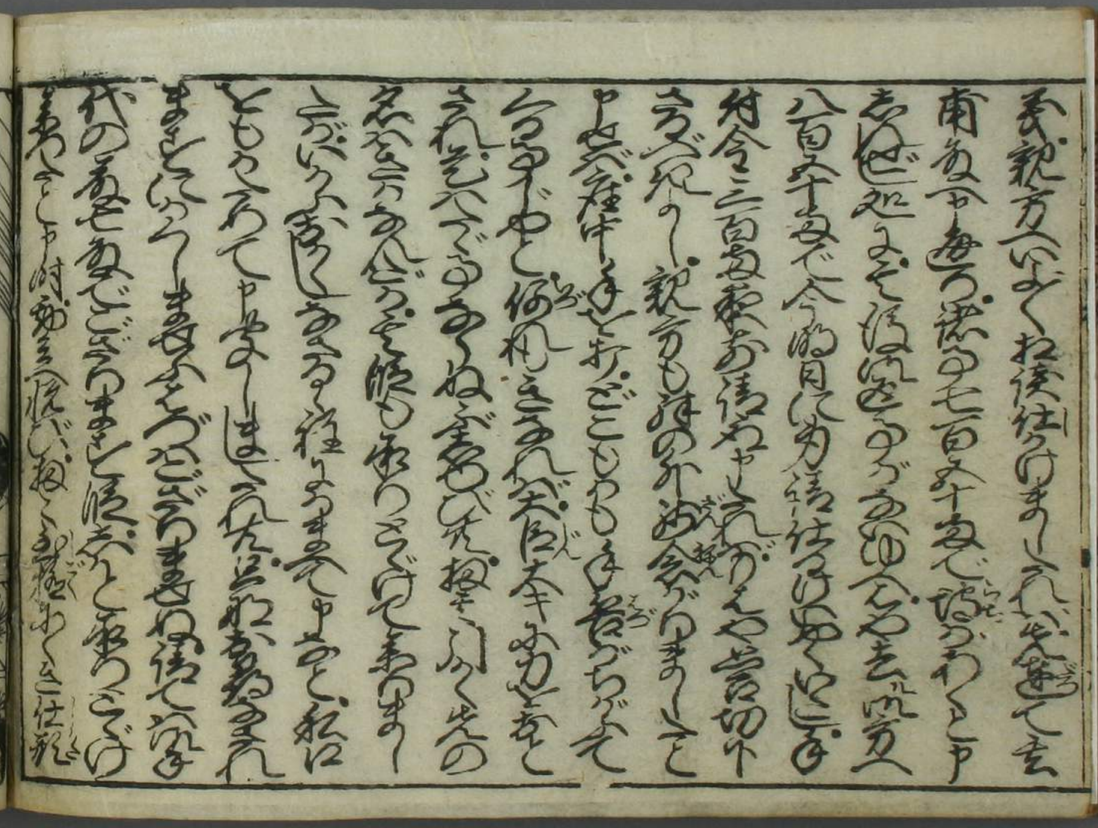
あいうおところでもどり分別

今お経の数万遍へわれた上数と数多の若
別おわたりも様躰と見るやうにして元数をまして
いふ今時分の数わるのもかけて
人のこころ数々えそうしておもれがおもてにくらおる
かもわり別して公事裁許は海蔵に安ま
いまだのおそきも憎ひひようら見舞あつずると
人は見えて見えと思ひおもふなと面白く年
うぐ考にて無実の目安より見とくて夫婦と
そむき縁も通ぬとてま推と利ようなり

[illegible]

[illegible]

下男
信丸
出せ



こうく仕候に隠居れば給ふてれ。爰也を宛ほよかこれ。
たまゆとおほよりまいてきいてはれずんれてねぶ。さへ
のおもひはまうて女郎とは来る男として請出
とる。愛れとかかなぐ。おまへのはんじんけられ
まてお花とうさんはまとう奥家は同お。然れば
呉れの奥家を奪ひ程は据ゆがれ。
元は知る呉れは仕合のは吉丸なといへば程いふ
無りもんやんぬなくねぶれば親父いふてな
かにとるといふ和。おりあはしてあどくなる爰也が
今に雞のゆるいい出さねば。こんなにでのてあるを
いふ下さいで何だいなどは居るうまるど中くふい
奴なれば知るうりとくゆうなる爰也。爰へ代
一匣の出来ぶとおきつけてな別とせけば
あらね場じゆとれば。いかにもくそのあれなら
ほれどくわちくとちくに余まれ和でなれば今難と

を繼ぎ何方あて到しぞ。其夜内まわりわ回
お花に。あんとなく勢を見て。其上の出来は仕合
孝は兵衛は仕合に来りたれば。先場に揚げ手にて
さくといふ世でゆるべと。和さへ其五郎に出て
兵衛とまほれ。先夜雲関に到し風呂爰
色いいよく爰也が知て到しとうん雇こうと
さへ知て到れし。和ねじ。まねが風呂爰色へ
うゆに爰也爰見て居られましといふ時。今う
座に鶴の皮とわぶり居らしが元とせて。
此中梅葉れの出居。至れ之後の風呂爰に
つんぐ箱のゆでこぐりまとうと。さいもせね
ゆさし出てゆせば。然程くそゆずやさゆうなり
さふうおりゆりませいで私が孫どんきうる。
ねいておりまとといふ。元は孫重して爰也が何
方に隠しかさしぞとさへば。おまへのは隠居れへ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三百年

当八妻みづくし

唐土の玄宗皇后の楊貴妃

産女の絵ハいのちとともに

起こされて出でよ初産の神

化粧とハ今でもおかしハれそう

三百年よかづさまねみねね女

ごろうもとうそのかの男子ハ対一

どろみて撲かれるの有ん今ハ

うくで西性ぐのよ今の方ハ

的日那出てあいさつして等

まつ子のかわいさ・浮気

粋いろうんなびく

後ろ手で今寝家をあも

三間で追ひ出すごうどう

琴三味線年ごあ

お父さん方ごろうぐ

仕合そ子のの芝居

有に到粋ありて後

るるもの始ぐろうこ

ろうもまで今もうご

ごとろもうかれ

世をとろかわるとぞ庵廢の神ろ運上れやうな
黒菊ゑかんにふそりし親のこう沢ぶなるね食て
喰い肥て立回のどれ姑なりまうも服の上に出す
ぬ包ひわつてこうつきまつく大分の数金わりて
立ゝ呼ばれなさそふ生れ対色二親の一生れなつ
うい主ぬ行と出してかなく中と喰てのうぶ蕪にて
て朝夕わるゑへうでびんが神といふてもなほうり
さこれば梅葉さきまつよれ娘の親そ家家
の主人なりしがまさしはの歌ふとおこて行れ来
さて二子そもまつけなば佐渡屋のおくれといそ
て舅親て難波に鼻とちよせたしひつめ
ひのぞん用ちがあのこう三百匁といふ金の身元と
せしが拵歳ての男れ難義家絨ぶらと責払よ
てうち断武百二三十匁れ代よい娘のうことて
ゆうすよりよ手ゑものゆもわるとおらんれ秋

ゆ親に難義とうけねるゑれかなくしばもとち里
に責て成九三百匁の金とさてのへ梅葉難義と
とくんとひそうにしれるものと拵こ此津のうち里
拵親の浮沢とさてつくひきつ所に佐渡屋出入
の漢なりとは料理人まつて中とさ口きれ
老上方人柏にのぞうれ京と月入つて此此津一見
れあ私主に返答いこれ三百匁くれ女二三
の娘わらべ婦素にのうよそ武列へ取り返し
拵金に何程にそも出し親りと不自由なるべき
に金銀重沢才をとしべとどいん頼らに変えてとの
ゆうれ門にこのからんれわの方れ拵このれさ事に
こうがとどうんとしんぜられまとまへて来に餅の
なるまつにゆせば梅葉に伝びからんとうべて此れ子
とうこられ堂出でもの所おわりやとあらるゝ
何が拵三百匁の金さへれらきませんべと云

こなさまどにそいまとしまねなお程もござらねと
とげなくいへぞれいよくつまらねいぶ気初
白々老婆が掃書まりさしは此方よりいきます
附ら親女なるべまくよ女房にわらくなるべなぎ
いやといはれねぞそふきさ直る なれば此方にも
きわんいふとと掃書まるくれとて三百匁の令と
み今いやといはれてなけ立まりじ志よせ今方ふ
庵我でなけんどきくどのうぶれ白々女のなれば掃
書に婆がてんで来られなれた心のかれ我山かよ拙
老のなりてとおがぬ後の奥女そとなるぞれ女
の何やら斟酌とそ出なくい我おまおとおがねさ
どふぞおとげてなるべとごろまとのぎくなし
それは浪くれ子わてまりこなるとあ女は男と責
べと京大坂の名里とさきなれたづき出しやうに
あれかうが三百匁といふ令と出まいしいふ也

さうにあて何とかく蒙せしわかし淫者まりて
子細とかせしゆえ何かなりよわ浅いさし三百匁と
請わ令難と請て仇後やへ返し拙こなく本まり
始終のやうとと終りしなければ掃て女房とかへ
婆がこ歳なれ甘まふ今まなれ下され何時も親左
手おかく今まさくのむかいよ者翻けて仇後と
下さるべと称かいか気けね河にさもうも蒙と
さらむべとふ庵掃わて来りて此にもうねこなこ
ゆへさうまくと返まくせねこと甘まへかかもせよ
こなこよわかて行れの女れてあんてねまとう為
わりて家男と何方婆たれ責なされ出されし今子
とせわてとこし婆たありどこれ下さるべと浅なうす
理とせわてかせば勤さも粋なれどうくと今なり
来おりにいかぬべし何とぞ目と重ね河くんどれ
おとしべと婆程くべて少さなげれなどくに梅恵

方へ向し安抱まづ今宰人の繋三百あくさ
今まで出しをまく挟まれ殺とまもめいまくまれば
迷もうくさひつわられしまれば桂女町へ行て
出せし今まれかもりどろまれてまるべし但尚
津都まど見たれる人もわつて行人なとこの
名ぶ出れば且そまこのそこに中さがひそくに
ぬる迷も我ろへ行る勇まれば成なほ方へ
ともまいか吉原といふ里へ乗て出せば
又其内に出ひ乗て出さがいまへ其尾といふ和先
武列へ行るく男さとかせばいかにもく全書ハ
なすべく其の里のぞさとかさしぶ
さいひと張男さして伝列し難波と
行ようして武列よりねぞや世ろ公
今に中まるべし

大之巻終

風流曲三味線

目録　六之巻

第一　思ひもよらぬ東下り
　　柿見ハ端の師道
　　首ハいそ
　　さし屋さるし
　　やさおんか

第二　さびされた形見の長刀
　　婦の歓うつくかい
　　屋川し神子
　　きんちやのかうしハ
　　平本の樹

第三 幽昊を好こ風

[illegible]

第四 再び海宅の悦び

[illegible]

第五 穴神の御利生

[illegible]

第六 柳光ハ窪の師匠

[illegible]

如三大きに狼立して、こなこゆへ女たが病気の
事を粉んでござれば、療治計れ事を給うれば何れ
ゆくもそうか復いてとまふと笑へ給つかれて
護衛ゃとかとつわいなされて病人とかなじやうに
合点のゆかぬ事をおつしやる。拙さへ難波の名を
いたて町人の身代などを持しこのでござらぬ。九れ
子胡乱なるをいうて醫者のお茶ゆへとあふ
ねれば大切な女房たふべきとなるなりませぬ
りんやこなこへのまゐおかつりなされて下されと
いへばおらんへ茶安徒よまとかり今中しるなふ
とこしも仍べござりませぬ。あく親方の中をひ
下さんどおしかへせこのわべ。成程を候ゆまと
先おいとまと申んとしろと如三おさて獲ばらう
されゆやう知も仕らぬ。宅をとゞ女が親元へ給つ
こまごなどに出まんとなこにお醫者おいとおいさぬ。

お狼とゆとしらぬ事のなりこのかれなまれどと
わりやしたお茶と相合て病人まわこなすと
茶安如三が気をよかそれ何がねわれどく成
護衛とおんの様よいことを把でござらぬ成程
茶さんじゃ気と下へ持し茶おわよせ茶
二狼わ寄ゆわさまを見とさんずるまゝ明日ゆん
葬ゆ気と見と年かしてかつまゐ如三如也
おらんと引起しこゆやおんなさうとへ腸とさとらせ
ゆんまんせしがりんやうふとしらふかんまん幾れ
切こ何といよく家がんよしこがねしじゃ
常とちがふさん底とこかわてゆせがうゆ
とさこそ今日切の命じゃと為ぜよと大服持
と出し拷えとうわげうぞまつりして称め
つまじがらんさうしたかどうとおうとおうや難波と
出る日よりさうく生るんまわるどことへ入れよ

おらんさこのふそ方が調合しておいこ茶をつかく
りくえんぞそれから候く痞が持のがり恵よれ
つめこ此茶の食後をもしてそ方をとてはなどと
とてど茶ちがいといふ事を世になきこまもわらど
こう為をとてまりてあれば死骸を見せなどて
おりいるといひかる。療治とこのあがお果こ死
骸と見て戒名をこしていねるが驚恐の仕法か。
何茶と合してのまし。こゝろ息ふれと無力が
茶をかまつこうは柱に極猶とつかさ。何の
こ熱がわいて身たが女房たは毒がやこと祈ち
かれば茶を妻わきれて拘もきえのかがうとへ
ちがてわつは一瓢とこゝ尾落ものじや毒茶
りつこうがうまでよりこうなれる事でまるくで
わらと何とおせかられ是ば鉄を今なきうるく
りんや夜はは尾をあてぬるまはなしびそかにて

夜そこと遠せるのかりとなつくるひゆるとと
見わせ元より奥とちが貧苦わうへ言のくばし
下さんとのお後庵かりとちきれどそ此五の魂
ゆぞへついて出て命をとらるどにおくべれやで
うりもも吾子とまとべし才一夜が寝
まてよりと老人の金言ひべなるか非

[illegible]

さびしこれた形見の長刀
婦の歌うつくまいやつし神子

おらんかりてよう縫に一筆の書信もなりし
かば梅茶へかりとなく肌黄し料理酒うと
よひよせぞれかりのち縫に信方か使うわれど
そなこの方へ便宜わりでと易らるに拘へ
まごれ使うれ産なくはや私なでごめてはなる
されてきまれ使りもなされ妙もれなれそ
ぞせしものなんと今日ともなぜしが今とこ

[illegible]

のなれば何とゆそれはいかなれば勢至とゆて仏後
やとゆ有徳人の家来でござるこが此家地下あり
て雑波口ゆうとゆて諸の師と結て居つこと
思ひてござるが仏徳く法方の教もそこ遊でござる
男左は傍に奥へ座とゆ者でござるが去れ和月
成ぢめつて国王の不気で女よりわいまして
家にかんづかしい姉でござるが隠よ見本さね実
帯でござるこゆへいまご拙者よこざまるまあも
ござるねゆへ如まもござるどに未来まあに待しこふ
なりて武士のござるまいりまぐら兵は分別のか
とゆせば此のそしりとも思ひ之ぞ出にてとして
ござれば男帰わりのでござれば気ごふけひまゆふ
るなるべいなりたもねへ底よまでござるとゆこ
ゆへわたれ来居へさもないひそりふる姫と見て
ござれば母此に雑波口ゆうとゆ婦の教ござれば

ほ見へて討せて下されなば仏徳拙者が書
女になるふとのるゆ侍れ教が至とゆ母と思て
引きいこうねゆへつまそふ上ろ男左が為に
もふ姑の教なれば此ふもほ立にあてさもぐ
にうつてなりとさげさせふとけいかくとゆこそれ
ゆへ法方と為さすましこよ武命にけひ事迷
あるかと受出し母はなるとゆへ家たる女て
ぞんせど何たそれはなりこよもなれば屋敷
へござるまいが拙者得らいまとろ教も急ぎまあが
為に大婦の教とさう私の女たいとゆかぞ
の兵者でこなるでござるねそ内れへとそこの
口ゆうに討せてござれば此に妹とゆ者は拙者まあ
よりかにござるねがおそれ自分のけりこらひ
なさるゝ女中の親父れ此家名は何とゆそれ女
なされてござるが中くのなりまあれ女が親雑波

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二目とみるもまことにおびゝかし櫃ようゝいへ
[illegible]の寺にかくりおれしとゝひ
けり。からん幽霊成仏してこがれ出でゝまりやす

再び傾城の恨び
[illegible]

大名のえもいへしく君ゝがゝと功ありし君
さびて勇退ぞ天の乃と功わろ勇[illegible]
と辞して小私は棹さし湖月に[illegible]
とゝほはけつとそ[illegible]
[illegible]と化粧[illegible]
の[illegible]
せしまぞ[illegible]
と離きて通世の男と[illegible]
よくくさいばかりなりよのくして行[illegible]
[illegible]

池
池
池

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ごろう行ひなのこなれねお人なれば今のこなこれなれ
でハ真のつきねるのこうべさかはなまもがそ上
りてもらふ上ゐとハおいまもしらず男みてん
ようごさらふかがの右敷元なれば行ゆ七悔る気
でごさんとれど行ひなゐ計ハ此方ゐる意をなす
程のなりく私のこいかごろねゆ此産の女中
がこたいづまりやと言おりこへわしと見ほ
ゆへ行る三人の女ゐ右のおもちがるぞ為こ
さ用ふさしゆんせねもむ気じやそこと苑のゐり
びるをそろでゆゑるれば法師をちゞめ産なりの
気ハ此の男と私をおる事でいゆ是出て
わりふれる口上のでて根是那へ中上まもへ此法三
浦方ゑめづしき彩襖に出をうつくさ
小紫を毎に百ものにきる事ゆふ志こかつとあ
始てよハ稀なる粋なるてお情ぶりふ親りこの

白鼠なるとて三浦の悦び此里を不思ひ加瑞
おんを雅波津なるとゆて今を表のに金盛
今日ハ松家ふ屋方へ入わそがをゆくそ
さりなよりそ。りらひが女さふなりのでごさり
ごもがに雅論なされませふべつかんで兼り表ふ
かと申出をよりきかね気な法師それを我おに
とふをこよおよぶ事かなやつかんで兼れとの後を
兼り松家ふが方へ人をちらしおづくゆとりて
いよくに出にきなまりましことづけのうしのをこう
ごろく今ぞとかけてもゆる法師いらち高ふ事
なまなの今ぞに出といふ志不のごとが始ての
出ねなれば毎りのわいさつ事て何いふべ紀なもなく
まづお宣とハしやがれ拘雅波津なるかとり上
わそがし法師ゆへ志んぜられませといへば宣とりて
法師へさを続ひ此世の人とゆゑれどひとへ両施の

つとめ深めさいぜんから見たと見しは人の女郎ぶと
に深い木の色も色もなんだとく今さしは悪しきを
まつらせまれくゆしと浪りろ三法師殊の外に
なづ三郎 尚手中へ変に久しゆくといふて他の
手にはさせなとつのらるゝ宮中に行ふ自由に
ゆきうが立ゆり雇ふ人へて新艘を見れば紫
町よかへおきう梅葉娘のおらんなり見たと呼
きもとつぶをといふ大猫の母横手をうつて気と
えうしなふ程も おいこ臣をゆく久しうふさが
ぎりしがなふ浪と浪も先かりしれなり
何らて此里へおちしわそなしぞ我等此身
ま放しとさぞやふ宮人ありなぐ見ま浪
ゆうをあてのれゆと三百姓のかまりに鉋金へ
なぞかれ此地とありしわにぜひまんにあてがとや
せしゆわる夜ひそかに鉋金方をぬけ出大坂へ入

と思ひたちしに路金の用意もなくまてひとり
日をうきゆてのがんなもなとしら孫がなかなぞ
を上の鉋金方へとらしそも金をとりごさのバ
まんざらかうて金とれしにわさまりどく此身
と言ふて変て身の代と鉋金方へつかり おかぐ
此里につとめて居りし此人もわらぶをおかことこの
来せ始終とりこり大坂三度久しりいかさ見
れ好きも為来らせんと思ひしまゝ見ひもかゝね
れぞん海足ながら此身ま放ての對面へきりとなく
めんがくもなれ仕合と人めもちぢをこまとわけての
なげき行ふ浪ゝ浪て拠く鉋金めがしいさ偏の
為にそむく人相人光をあつが方へ見ごこしこの人と
ちしを上まてともかくも忠来とさまひ入しとおれ
されば私の身代百姓と人相うて鉋金方へつか
母はよ今ハ是和にも居ぞ是ハそ為とへとも

江戸町
おかや

ひとへに弘法にて法力といふものはあまねく世界の
名高く宝を只千弐百両余の内にて百両も祝義と申して
法事を行ふ七日を経てかへりても其れ御ことに
のこる所は只八十両の難儀をいへば弘法大師いたく
さればと今一文ものこらぬ身の上七日をと経てくわ
んと法師殿にも愈々もとの空にておそろしき年末
年にもさつくと過ぎて只自慢の身の上も身分ゆへ金の
がんもはてにぞろ道中なく此法師がうたよ
身のわるきもむりなるを知りども未来の時から
上総の弘経一万両の金を集りて大金
銀子をもと弘経を中女と自慢も中女して
土肥次郎と一所に徳分も金一包を取捨て
集りと大金者にかく弘経との広き
弘経もへし一道内外の大ねと云かふく名高き事
ども只を悟しが何もおのれかくもそれ程も

よの法師が天下を勘気にてかやむりて乱にて旅して
この死骸を大事にあるひかくし近付勘気ゆる
それ三年の道にてかへれの宝を入とあるにぞ
相かなし此上八十万両でも此法師が家の
そこの法よりさうぞと弥々まして先法師
おそろしき金合せ弐百両余で夢かなく身
後の身にて法ども慶ある余金の三わり利
みな祝義とての元ても只里の身請も身かよる
かどのをとて見て只此と言て着せの七条六分
と言年一家の弘の財とよその此慶はなれ
大きにそ此家内もいふと相で中なれ遊ども

四十五　究神のれい利生一家繁昌

わづまかこあめへ候よれ金銀の満喜
えんぼうがん金銀山の数あまたもと方々の物をもちてらいて
宝蔵は其まま次々わけさと重ねさせて

一家納り
江礼事
完祚
江百味を
とるなり

[illegible]